平成14年度 文化庁芸術拠点形成事業報告書

伝えるということは？

～学芸員が贈る子どもたちへのメッセージ～

愛知県博物館協会　子どもと博物館研究会

平成14年度文化庁芸術拠点形成事業報告書
愛知県博物館協会　子どもと博物館研究会

発行●愛知県博物館協会　子どもと博物館研究会
〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2　愛知県美術館内
TEL052-971-5511 FAX052-971-5604

この報告書は再生紙を使用しています。
PRINTED WITH SOY INK
この印刷物は石油系インキではなく、地球に優しい大豆油を使用したインキで印刷されています。

はじめに

本書は、平成14年度文化庁芸術拠点形成（展覧会事業等支援）事業の委託を、愛知県博物館協会子どもと博物館研究会が受け実施した地域連携事業『伝えるということは？～学芸員が贈る子どもたちへのメッセージワークショップ～』における事業実施報告書である。

子どもと博物館研究会は、平成11年5月に愛知県博物館協会内に発足し、これまで平成12年度文部省「親しむ博物館づくり事業-あいち子ども体験ミュージアム事業」をはじめ、研究会や見学会などを実施してきた。研究会員は、愛知県博物館協会加盟館の学芸員を中心に構成されている。平成14年度は、館園だけではなく、外部の教育関係者にも会員を募った。

最近では、幼児を含めた子どもを対象としたさまざまな事業が注目され、研究会を発足しようと考え始めた平成10年当時とは、ずいぶん子ども対象事業をめぐる環境が異なってきている。「子ども向け事業に対する周りの理解がない。」という時代から、「数多ある行事から秀でるための何かが必要である。」という時代になってきたと言える。ただ、入館者数と展覧会の善し悪しが比例しないのと同様、良い講座と応募者数・参加者数はおそらく比例しない。にもかかわらず、いずれも人数や歳入で評価される時代となってきた。オリジナリティが踏み荒らされる時代にもなってきた。研究史も踏まえ、先駆者を評価し、地道に、しかもその時々の子どもたちやその保護者のニーズに応えられる活動が、今求められている。

ただ、理想と現実のギャップは我々がたえず直面する問題であり、今回の本事業も準備が整わぬまま動き出した勇み足であるとともに、12月に委嘱の通知を受けた事業を翌1月12日から実施するという強硬なスケジュールに、連携によって成り立つ当研究会が対応不能であったことも確かである。今流行している（あえて流行という言葉を使いたい）「連携」という言葉の矛盾を身をもって感じ、反省のみが支配するものである。ただ、前向きに考えれば、自館では限られた人脈の中で事業を展開している学芸員が、他の方法を学び合う良い機会であった。

前回の『あいち子ども体験ミュージアム事業』は、時間を長くとったワークショップの企画であった。今回は、数多くの子どもを対象としなければならない場合の心得を、多くの反省から学んだと言える。実績として学芸員が入館者数を問われる以上、これまでのような少数制の講座だけでは館の存亡にかかわってくる。発言力がその研究実績ではなく、集客実績から生まれる時代だとすれば、形振り構わぬ一面も必要だと思う。研究者であることを肝に銘じながら.....。

この報告書が、これからの博物館活動に際し、失敗も含め少しでも役に立てばと思う。

2003.3.31　愛知県博物館協会　子どもと博物館研究会

（文責　事務局）

「伝えるということは？」ワークショップ記録DVD
※このディスクは、DVDビデオ対応のプレーヤーで再生して下さい。

もくじ

はじめに…… 1

本事業の概要…… 3

○○展示○○○○○○…… 4
普及部門　「伝えるということ」…… 5
考古部門　「貝塚からわかる縄文時代の食べもの」…… 6
陶芸部門　「現代のやきもの作者からのメッセージ」…… 7
美術部門　「絵のこころ・絵の道具」…… 8
歴史部門　「伝える手段（てだて）」…… 9
民俗部門　「民具（みんぐ）と話そう」…… 10
自然部門　「自然と人とのかかわり」…… 11
遊びのワークショップパネルの展示…… 13

○○ワークショップ○○…… 14
○○会場○○一宮市博物館
民俗部門　「つくって遊ぼう！」…… 15
陶芸部門　「さわって、感じて、作ってみよう！」…… 17
歴史部門　「おてがみ道場」「江戸時代の遊び」…… 19
考古部門　「縄文人になろう！」…… 21
美術部門　「いろんな絵の具をためしてみよう！」…… 24
遊び部門　「おしゃべりなロープ」…… 26
　　「ワークショップ総集編」…… 28
○○会場○○愛知県陶磁資料館
陶芸部門　「さわって、感じて、作ってみよう！」…… 30
○○会場○○鳳来寺山自然科学博物館
自然部門　「ひな祭りのひし餅をつくろう」…… 32
○○会場○○豊橋市美術博物館
考古部門　「体験！弥生生活」…… 35

子ども向け解説書「かるた」…… 38

おわりに…… 40
謝　　辞…… 41

表紙イラスト「かるた」表紙より
描画　橋本久美

本事業の概要

本事業は、文化庁の平成14年度「芸術拠点形成事業（展覧会事業等支援）」の委嘱を愛知県博物館協会子どもと博物館研究会が受けて実施したものである。委嘱を受けた愛知県博物館協会子どもと博物館研究会の研究会員の中から今回の委嘱事業に参加したい会員を募り、さらに研究会員外の方にも数多くご協力をお願いして事業を実施した。事業は10のワークショップとそれに付随する展覧会から成り立っている。

（図2）
配付リーフレット（表／裏）

●組織

事務局は展覧会場となり、ワークショップを最も多く実施する一宮市博物館に置き、事務的な処理および報告書作成を担った。表1が参加した学芸員などの氏名と所属館、ご協力を得た方々の氏名などである。会場となった博物館・美術館を始め、参加者・協力者はもちろん、所属する館園にもたいへんなご迷惑をおかけし、また、あたたかいご協力をいただいた。末尾の謝辞にご芳名を記載したので、ご参照いただきたい。

●事業概要

今回の展覧会、ワークショップに共通するテーマは「伝えるということは？～学芸員が贈る子どもたちへのメッセージ～」である。我々学芸員は、調査研究を通じて得た情報や資料を、展覧会の開催や展覧会図録の発行、研究論文の発表などで公開している。ただ、それぞれのよりどころとする分野での考え方に影響されることが多いと言える。例えば考古学や民俗学と美術とでは取り扱う資料も異なり、研究方法も違うため、両者の学芸員にあまり接点がないように、歩み寄りにくい部分も多々ある。しかし、いずれも人が作ってきた業績を研究しており、必ずや接点があるものである。そこで、それぞれの学芸員が「伝えたいこと」を「子ども」を媒体にして今回は考えてみた。

そして、最後にできあがりとして、植物や動物、岩石などの自然資料をめぐって人が活動をしているという様子が表現されたである（4ページ／図1）。もちろん、時間的な余裕が全くない中で、Eメールを多用した情報交換の中でやっとできあがったわけで、従来の電話や会合という方法をとっていたら、おそらくこの事業は達成できなかった。

（1）展覧会

○会場／一宮市博物館特別展示室

展覧会は「伝えるということは」という共通テーマの中で、それぞれの分野が小テーマを設けて企画した。展示は、以下の7つの部門に分かれている（写真1）。それぞれの内容については各報告に記載した。

・普及部門「伝えるということ」
・考古部門「貝塚からわかる縄文時代の食べもの」
・陶芸部門「現代のやきもの作者からのメッセージ」
・美術部門「絵のこころ・絵の道具」
・歴史部門「伝える手段（てだて）」
・民俗部門「民具（みんぐ）と話そう」
・自然部門「自然と人とのかかわり」

（写真1）展示室の様子

（2）ワークショップ

今回の事業の場合、「ともにつくりだす」という方向性ではないやり方をしているため、ワークショップという言葉を本来は使用すべきではない。この言葉を使用してしまったことを、深く反省している。しかし、便宜的に、以下ワークショップという言葉を使わせていただきたい。

ワークショップは、4つの会場で合計10日間実施した。それぞれの内容については各報告に記載した。募集方法などの詳細については、それぞれの報告によるとして、会場が一宮市博物館のものについては、図2の配布したリーフレットを参照されたい。時間は美術をのぞいて10時から12時、13時から15時の2回であるが、定員がないもの、あるものが混在していたため、来館者側に混乱が生じた。

○会場／一宮市博物館
・民俗ワークショップ
　「つくって遊ぼう」（2003.1.12）
・陶芸ワークショップ
　「さわって、感じて、作ってみよう」（2003.1.19）
・歴史ワークショップ
　「おてがみ道場」ほか（2003.1.26）
・考古ワークショップ
　「縄文人になろう」（2003.2.2）
・美術ワークショップ
　「いろんな絵の具をためしてみよう」（2003.2.9）
・遊びのワークショップ
　「おしゃべりなロープ」（2003.2.16）
・ワークショップ総集編（2003.2.23）
○会場／愛知県陶磁資料館
・陶芸ワークショップ
　「さわって、感じて、作ってみよう」（2003.2.9）
○会場／鳳来寺山自然科学博物館
・自然ワークショップ
　「ひな祭りのひし餅をつくろう」（2003.3.2）
○会場／豊橋市美術博物館
・考古ワークショップ
　「体験！弥生生活」（2003.3.23）

（3）映像記録の作成

今回は、展示室に普及活動に関わる簡単な映像（徳川美術館「刀バラバラ事件」）を公開したとともに、各ワークショップの様子を映像記録として残した。それを編集し、本書に添付した。

展　示

伝えるということは？

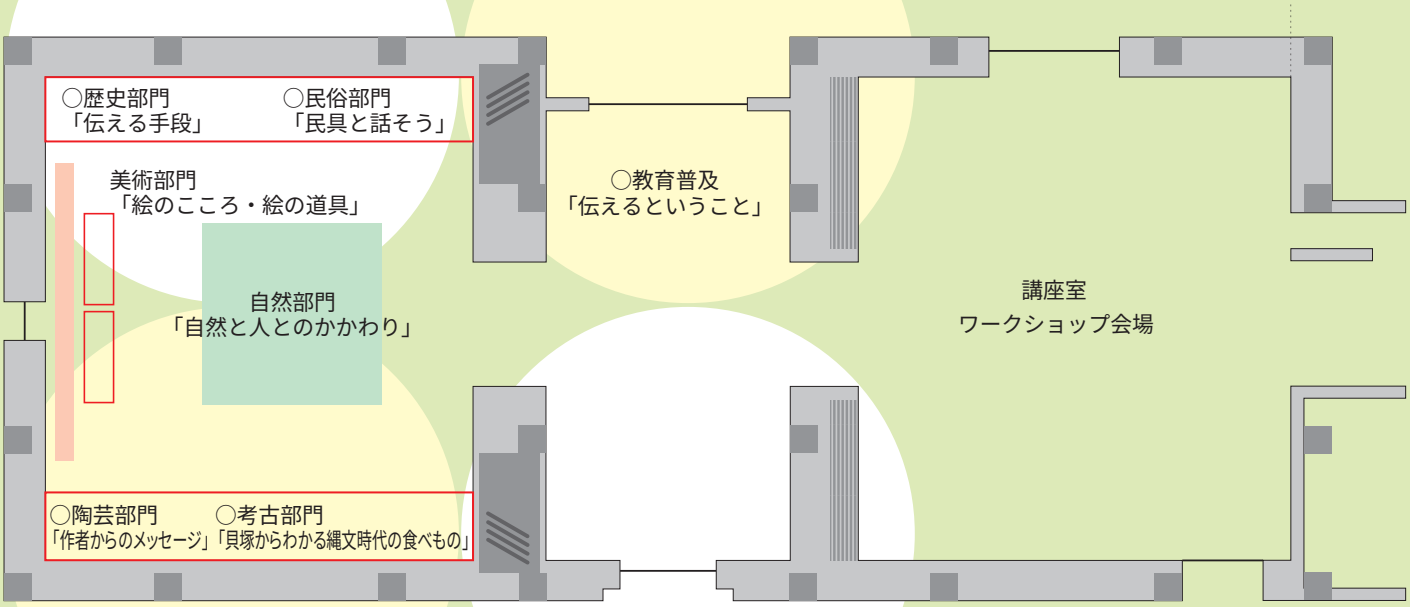
～学芸員が贈る子どもたちへのメッセージ

○○日時○○

平成15年1月11日(土)～2月23日(日)

○○会場○○

一宮市博物館



（図1）展示室配置図

普及部門

伝えるということ

企画担当者●加藤啓子（徳川美術館）

企画の趣旨と内容

美術館・博物館では収蔵品の管理・収集や展覧会だけでなく、教育普及活動も重要な業務である。各館、これまでは大人を対象にした講座や企画を実施してきた。約10年前から、展示やワークシートの作成、体験教室など、子ども向けプログラムが数多く実施されるようになり、さまざまな試みや研究が行われてきた。さらに平成14年度の学校五日制の導入から、各館さらにワークショップを実施し、試行錯誤している状況である。

こうした現状を踏まえ実施可能な新しい子ども向けプログラムを創出することを目的として、さまざまな博物館および学問分野の学芸員が所属し、広範囲な個性と知恵を結集できる愛知県博物館協会を母胎として「子どもと博物館研究会」を発足した。

活動としては、研究会の開催、注目されているワークショップ・展覧会の見学会、ニュースレターの発行、ホームページの作成などである。

今回、「子どもと博物館研究会」の活動内容および活動経歴をパネルや報告書で紹介した。

さらに研究会に参加している館の教育普及活動をパネルやワークショップで使用する教材の展示によって紹介した。

普及部門として、一宮市博物館、豊田市郷土資料館、蒲郡市博物館、愛知県陶磁資料館、豊橋市自然史博物館、トヨタ博物館、高浜市やきものの里かわら美術館、豊橋市美術博物館、名古屋市博物館、刈谷市美術館、稲沢市荻須記念美術館、愛知こどもの国 育成環境課(財団法人 愛知公園協会)、徳川美術館の普及活動をパネルで紹介した。

さらに、一宮市博物館のアンギン編台ほか、豊田市郷土資料館の土偶と「勾玉づくり」の教材、愛知県陶磁資料館の陶磁器の見本、トヨタ博物館の車両のペーパークラフトやウレタンクラフト、名古屋市博物館の日光写真など、刈谷市美術館の観賞カード、稲沢市荻須記念美術館の「つくろう幻想スライド」のスライド、徳川美術館の「刀バラバラ体験」用の刀剣などを展示した。

今後の課題

今回は研究会の参加館に限ったが、県下の美術館・博物館でも、さまざまなワークショップやアウトリーチ活動を実施している。各館園の教育普及活動のさらなる発展を期待したい。

（文責　加藤啓子）

展示風景

考古部門

貝塚からわかる縄文時代の食べもの

企画担当者●岩瀬彰利(豊橋市美術博物館)、斉藤弘之(安城市歴史博物館)
水野知枝(荒木集成館)

展示風景

企画の趣旨

縄文時代の貝塚は、単なるゴミ捨て場ではなく、再生を願う場所として考えられている。この貝塚からは不要となった土器や石器などの日常生活品に加え、魚骨や獣骨などの食料残滓が出土し、当時の食生活や生活習慣がわかる貴重な遺跡である。近年の自然科学分析の進展により、貝を採った季節や当時の食料の割合など、様々な情報がわかるようになった。ここでは、最近の分析データを提示して、貝塚を調べると何がわかるかを紹介し、縄文時代の生活環境を復元する。そして遺跡を調べることによって、当時の生活習慣が自然と共生していることを学ばせ、遺跡の大切さや調査の重要性を子どもたちに教えるものである。

内　容

○導入：貝塚の説明(剥ぎ取り資料を基に)

○展開

縄文の食生活：(漁撈・狩猟・採集)

自然科学分析の紹介：

(成長線分析などの分析法を紹介する)

○結び

縄文土器の表現：縄文土器の装飾から意匠を探る。→現代陶芸へとつながる。

展示資料

- 貝塚：貝層剥ぎ取り／素材＝貝：大西貝塚出土品（豊橋市美術博物館）
- 漁撈：貝殻（ハイガイ・ハマグリなど）／素材＝貝：堀内貝塚出土品（安城市歴史博物館）、魚骨（クロダイ・マダイなど）／素材＝魚：堀内貝塚出土品（安城市歴史博物館）、獣骨（シカ・イノシシ）／素材＝動物：堀内貝塚出土品（安城市歴史博物館）、ヤス／素材＝シカ：伊川津貝塚出土品（豊橋市美術博物館）、釣針・銛／素材＝シカ：瓜郷遺跡出土品（豊橋市美術博物館）※参考出品、石錘／素材＝石：川地貝塚出土品（荒木集成館）
- 狩猟：石鏃／素材＝安山岩・チャート：伊川津貝塚出土品（豊橋市美術博物館）
- 採集：石皿／素材＝安山岩：大西貝塚出土品（豊橋市美術博物館）、磨石／素材＝石：大蚊里貝塚出土品（豊橋市美術博物館）、鹿角斧／素材＝シカ：水神第１貝塚出土品（豊橋市美術博物館）
- 土器の表現：縄文土器（深鉢・鉢）／素材＝土：馬見塚遺跡(一宮市博物館)

今後の課題

今回の展示のテーマは、「伝えるということは？～学芸員が贈る子どもたちへのメッセージ～」である。この「伝えるということ」を、我々は伝達手段ではなく、「子どもたちへのメッセージ」とリンクさせて、「子どもたちへ伝えたいこと」と解釈した。それ故、最も子どもたちへ伝えたいことを「遺跡の大切さと調査の重要性」と考えた。

遺跡には、説明のし易さから縄文時代の貝塚を一例にとりあげた。貝塚は様々な情報を蓄えており、これを調べることによって、当時の生活様式や生活環境などを知ることができるからである。展示には、貝塚出土の貝類、獣骨、魚骨などの食料残滓や獲得道具、現生標本を並べて、漁撈、狩猟、採集ごとに区切って展示し、パネルで説明する、従来の手法を採った。そして最後に煮炊き具である縄文土器を並べ、その文様や意匠が陶芸へとつながるものと関連づけた。

展示には、本来は方法論的な内容を考えていたが、実際は具象化した遺物の陳列とパネルの説明になったことは否めない。

反省点であるが、まず展示がオーソドックスすぎた点である。展示構成を検討して確定した後に、某博物館の常設展をみると、内容が全く同じであったという事実が示すように、平凡な展示であったことは否めない。考古の展示は、資料第一主義であり、資料を基に論を展開していくのが常套手段である。このため、奇抜で斬新な展示ではなく、歴史的事実というのは変化するものではないため、平凡でもあくまでも基本的な展示スタンスに始終した。しかし、実際に展示してみると、平凡すぎる展示に見劣りを感じたことは事実である。また、子ども向けの展示にもかかわらず、全体に文字による説明が多くなってしまったことにも気づいた。子どもたちに内容を理解してもらうためではあったが、展示品の説明をほとんど文字に頼ってしまったと言えなくもない。文字に頼らず、いかにわかり易く子どもたちに伝えるかということの難しさを痛感した。それと同時に、果たしてこの内容で子どもたちに企画主旨が伝わったのであろうかと疑問を感じた。平凡な展示＝展示手法に工夫ができない言訳にすぎないと反省した。

子どもと博物館研究会という名が示すように、子どもと銘打っている限りは、もう少し冒険して、子どもにとっての最良の展示手法を考える必要があったし、それが他県の博物館関係者から子どもと博物館研究会に寄せられている関心事であろう。今後、展示においては、新たな視点から、子ども向けの手法を開発するぐらいの気持ちで望まなくてはと考えた。

（文責　岩瀬彰利、水野知枝）

陶芸部門

現代のやきもの 作者からのメッセージ

企画担当者●佐藤一信（愛知県陶磁資料館）

展示風景

企画の趣旨

やきものの中でも難解というイメージがある現代陶芸の作品の中から展覧会のメインテーマである「伝えるということは？」にあわせて選択した。「伝えるということ」を「作者があらわしたこと」、「表現すること」そして「作者のメッセージ」と広げ、それを鑑賞者がどう感じて、どのように楽しむのかというきっかけ、ヒントを提示し、現代の陶芸への関心を呼び起こすことを目的に展示をおこなった。

内　容

作品は作者のメッセージが込められた（表現された）ものである。そのメッセージには、正しい唯一の答えなどはない。鑑賞者はそれをどのように感じることも（または何も感じないことも含め）自由である。鑑賞者の感性、知識、経験などによってどう感じるかは本当に様々である。

作品には作者からのメッセージが込められているが、次の二つの作品は、さらに具体的に伝達手段や伝達機器を形の中に取り込んでいる。「パンドラの箱」は、箱の中にリアルな本が入っている。「マイクのついた鳥」は文字どおり、マイクと呼んでいる突起（穴）がある。

作品に込められたメッセージは、それについてコミュニケーションをとることによって生きたものとなる。作品をはさんで、学芸員と鑑賞者、また、鑑賞者と鑑賞者がコミュニケーション（知覚・感情・思考の伝達）をはかることが可能で、しかも、重要なことである。「脳の形のティーポット」、「土に還る」は鑑賞者の興味・関心を惹きつけ易く、且つ、従来のやきものという既成概念から離れている点を考慮し、セレクトした。

作品４点はすべて展示ケースに入り、無論触れることが出来るものではない。さらに、学芸員と鑑賞者のコミュニケーションといっても、自分の勤務する館でもなく、他にガイドをする専属スタッフもいない。よって、鑑賞者が作品を楽しむヒントは、展覧会全体の「かるた」、作品のバックに貼ったパネル、陶磁資料館で子どものための展覧会用に作った触れるキットが中心となった。この内、キットについて述べると、陶磁資料館のボランティアに協力していただき、自由に触ることを目的に作成したものである。例えば、いろいろな土を用いてこま犬を作り、土の比較をしたものがある。木節粘土、蛙目粘土といった、やきものに適した土だけでなく、畑の土、砂を焼き固めた「土に還る」を連想させるものもある。また、同じ土が焼成時間と温度の変化で色が変わっていく様をこま犬の姿で作ったキットもある。それらは会場の制約から作品のそばに置くことは出来なかったが、展示室入り口付近に配置した。しかし、これも人がいてのキットである。一宮市博物館の看視の方々へのレクチャーも充分でなく、筆者が充分にこれを使ってガイドし、鑑賞者がそれに自由に触れていたのは、他の人が企画したワークショップ当日の空き時間と１月19日（日）の筆者の企画ワークショップでワークショップに参加出来なかった数組の方々に対応した時間のみであった。

展示資料

- （作者）荒木高子（作品）パンドラの箱
- （作者）鯉江良二（作品）土に還る
- （作者）リチャード・ノトキン
  （作品）脳の形のティーポット
- （作者）若菜洋好
  （作品）マイクのついた鳥
  （千葉県立盲学校生徒作品）

今後の課題

筆者の担当した分野については、課題というには不完全な部分が多い。充分な下準備が出来なかったこと。この会場用の触れるキットを用意すべきだった。全体のガイドブックといえる「かるた」の役割を軽視し、最適なガイドとならなかったこと。

その中でも、次にやるべきこととして、作品についてのガイドマニュアル作成の必要性を痛感した。ガイドの基本的な姿勢を明確にしたものを作り、第三者の方にもガイド可能にすることが今回の展示の中で得た筆者にとって最大の課題である。（文責　佐藤一信）

マイクのついた鳥
若菜洋好

美術部門

絵のこころ・絵の道具

企画担当者●山田美佐子（稲沢市荻須記念美術館）
橋本久美（高浜市やきものの里かわら美術館）
企画協力者●松本育子（刈谷市美術館）・阿野文香（はるひ美術館）

企画の趣旨と内容

研究会事務局から開催要項が配布され、美術館学芸員の会員が展示内容を考え、展示資料を供出し、ワークショップを開催するよう呼びかけがあった。

美術において、第一となる資料は作品だが、運搬・保険・著作権などを考慮すると、今回の企画内容ではリスクが大きすぎる。このため、作品の移動を伴わないよう、開催会場である一宮市博物館の所蔵品から展示を構成することとした。また、「くらしと道具」という一宮市博の展覧会の番外編という位置づけもあるので、道具→絵の道具という発想から、油絵の画材と日本画の画材を展示することとした。画材は、高浜市かわら美術館と、美術館の教育普及研究組織「アミューズ・ヴィジョン研究会」の事務局で、教育普及事業を実践している刈谷市美術館の松本学芸員に協力を仰いだところ、過去に両館が展示したものを借用できることになった。また、洋画専門の、はるひ美術館の阿野学芸員に、特殊な油彩用の筆の借用を依頼した。資料の貸出のみならず、松本、阿野の両学芸員には、搬入・展示・ワークショップ・搬出とすべてに御協力いただいた。この場を借りてお礼申しあげたい。

さて、油絵と日本画の画材の対比に即して、作品を選定した結果、佐分真(1898-1936)、荻須高徳(1901-1986)の油絵、棟方志功(1903-1975）の版画、山本梅逸(1783-1857）の日本画を展示することとした。佐分、荻須、棟方は、同時代に生まれ、ともに若い頃接した油絵から触発され、生涯の画業の方向性を決めている。すなわち、それまでの日本画にない写実性と力強さに惹かれた佐分と荻須は、当時芸術の都であったパリに渡り本格的な油絵を習得し、油絵に負けない強い絵を描きたいと思った棟方は、「わだばゴッホになりたい（私はゴッホになりたい)」と、力強い版画を彫ったのである。新しい絵の具との出会いによって、何を描くかも変わっていくのである。絵を描く心と道具が、不即不離のものであることを、この展示から理解していただければと考えた。

また、自然部門の展示が同じ室内で行われることから、人間が、ひとに何かを伝えるために絵の道具を工夫してきたという、歴史的な視点も加味することができたのは幸いであった。筆の材料となる動物の剥製や、顔料となる鉱石、紙となる植物など、美術の企画に即して資料を展示してくださった、自然部門の方々には、深く感謝する。

展示資料

○作品

(1)「ヴェネツィアの宮殿」　荻須高徳
　1961年頃　油彩・画布
(2)「ブルターニュの女たち」　佐分真
　1930年　油彩・画布
(3) 勝曼譜善知鳥版画巻から
「連枝の柵」「風乗の柵」「蓑笠の柵」
　棟方志功　1938年　木版・紙
(4) 四季花鳥図から「梅椿に水仙」
　山本梅逸　1851年　絹本着色
　以上　一宮市博物館所蔵品

○画材

(1) 油絵用画材
・ カンヴァス・ペインティングナイフ
・ パレットナイフ・画用オイル各種
・ 油絵の具(チューブ入り12色)
・ 筆　など

(2) 日本画用画材
・三千本膠（さんぜんぼんにかわ）
・鹿膠（しかにかわ）　・墨
・岩絵の具と、その原料となる鉱石
・胡粉　・方解末（ほうかいまつ)
・筆各種　・麻紙（まし）
・楮紙（こうぞし）　・絹　など
以上　刈谷市美術館、高浜市かわら美術館提供

今後の課題

今回の展示は、多数の美術館博物館の所蔵資料、調査研究、人材という蓄積があってこそのものであり、急遽、研究会の要請に応えられたのも、博物館の基盤であるこの3点があったからだと、強調しておきたいと思う。子どものための事業は、美術館博物館という木に生る大きな果実であり、一朝一夕で実るものではない。あちこちの美術館で聞かれる作品購入をはじめとする運営予算の削減や、人員の削減は、その木が育たないことを意味している。国の予算は、実だけでなく木そのものに行きわたる養分にも使ってほしいと望む。

多忙な中でこの企画を実現した研究会事務局に敬意を払いつつ、今後は、この事業で培われた経験を、所属する館の活動に生かしていきたいと思っている。　（文責　山田美佐子）

歴史部門

伝える手段（てだて）

企画担当者●淺野弘子（名古屋市博物館）

企画の趣旨

現在のようにさまざまな通信手段がうまれる以前、手紙は人々の意思を伝えるものとして重要な役割を担った。当時の手紙は、内容だけでなくその形・送り方・書式などから、出された目的・意図・心配りを伝えるものであった。今回の企画展のメインテーマは「伝えるということは？」であったが、これら先人の遺した手紙は「伝える」ことの意味や「伝わる」ことの大切さを現代の私達に示してくれるのである。このような送る側と受け取る側の意思をつなぐという、手紙＝文字媒体の特性と、それを最大に生かした各時代の資料を紹介した。

内　容

戦国時代以降を対象として大きく郵便制度が生まれる以前と以後に分け、各時代の書状を紹介した。郵便制度以前では、戦国時代の典型的な折紙と、江戸時代の一般的な書状を紹介し、その様式の違いを紹介する。以後に生まれた封書・葉書や軍事郵便は、あらかじめ設定された規格・料金で送られるようになった。また書札礼を基本とした手紙の「ルール」は、電子化された今日でも形を変えて生き続けていることにふれ、現代との接点を意識してもらうこともねらった。

展示資料

- 豊臣秀吉朱印状（複製パネル　原資料名古屋市博物館蔵）天王坊宛　桃山時代
- 書状（小嶋家文書 27　一宮市博物館寄託）小嶋十郎兵衛宛　江戸時代後期
- 書状（小嶋家文書 123-12-19　一宮市博物館寄託）そんじ□宛　江戸時代後期
- 往来物（複製パネル　原資料名古屋市博物館蔵）江戸時代後期
- 封書（一宮市博物館蔵）市橋鐸宛　明治時代
- 葉書（一宮市博物館蔵）不律会御帖部宛　昭和
- 葉書（一宮市博物館蔵）桜井松居宛　昭和
- 軍事郵便（一宮市博物館蔵）横井伝十郎宛　昭和
- FAX 用紙（書式例パネル）
- E メール文例（パネル）

今後の課題

限られた資料の中で出品資料の選択を行ったため、内容に偏りがかなり出てしまった。釈文をあえてつけず、手紙の構成をできるだけ補助パネルで説明していく形をとったが、子どもたちにとっては古文書の字面自体を敬遠する第一印象がぬぐえなかったのではないかと考えている。

また、書状の料紙も伝達の重要な要素となるため、当初は和紙の原料などについても展示の中でふれるつもりだったが叶わず、自然分野など他の分野の展示との関係性を伝えきれなかった。ただ、ワークショップの際に、原料である楮や三椏の実物標本を用いて説明を行うことができた点はよかったと思う。

（文責　淺野弘子）

展示風景

民俗部門

民具（みんぐ）と話そう

企画担当者●久保禎子（一宮市博物館）

（上／写真 1）展示室の様子
（下／写真 2）トイレットペーパークイズ

企画の趣旨

民具というのは、卑近であるが故にこれまでは見過ごされてきたことが多かった。しかし、さらに時代は変わり、生活スタイルや流通する物資の多さ、素材の変化により、子どもたちが民具を目にする機会が日常生活の中でほとんどなくなってしまった。そして、民具はまるで考古学の発掘資料のようになってしまった。しかし、民具には人が生きていくための知恵が詰まっており、考古資料をはじめ、さまざまな歴史資料を紐解く鍵でもある。

今回は、その民具について考える、伝える方法として３つのテーマを設定して展示した（写真 1）。

（1）民具（みんぐ）ってなに？

…考古資料と比較しながら、民具（みんぐ）がどのような資料なのかを説明する（図 1）。

（図 1）考古資料と民俗資料

（2）博物館に民具がやってくる

…ゴミとして捨てられる運命にある民具が資料となる過程を紹介（図 2）。

（3）観察してみよう

…素材の違いを、カゴ類や衣類を中心に展示。一宮市のような平野部で使うカゴ類はほとんどが竹製の流通品であるが、山間部などではマタタビやシナ、アケビなど、本来人が植物を利用して生活道具を作っていたことを示す貴重な資料が残っていた。その素材の違いがわかる資料を展示。

（4）あそぶ

…2 階民俗展示室には、アブダコをはじめ石けりや手まりなどの子どもたちがもっとも生活の違いを理解しやすい遊びの道具を展示した。

内　容

１のテーマでは簡単な煮炊きの道具の変遷を縄文時代からたどり、民具も考古資料も物質文化としては同じであることを説明した。２では、民具が博物館に運ばれて、資料としてよみがえる姿を表現した。また、３では、脇田雅彦氏所蔵の全国で収集されたヤマブドウやウルシ製などのカゴ類を、竹のカゴと比較しながら展示した。衣類についても、木綿や絹が主流の一宮市域の資料に比較し、アンギンやヤマブドウを使ったミノを展示した。脇田節子氏のご教示により、今のトイレットペーパーと以前使用していたクズの葉、カキの葉、ステギ、少年サンデーなどをクイズ形式で展示した（写真 2）。

展示資料

表１に示したように、４つのテーマで 57 点を展示した。

今後の課題

今回は、展示室が狭かったことにより、一つ一つのテーマに割り当てられるスペースが少なかった。そのことが、言葉足らずの展示を作った原因の一つと言える。時間的な余裕がなく、入念な企画を練ることもできなった。また、たとえ時間があったとしても、異なる組織に属するメンバーが、一同に会することの難しさを非常に感じた。資料の貸借については通常かなり以前からの交渉が必要であり、今回のような事情の中ではそれが難しく、諸機関にたいへんなご迷惑をおかけした。

このような連携を伴う企画は、メンバーが同時に会し話し合う機会が作りにくいという点で、単独企画と同様のスケジュールでは実施が難しい。また、何をテーマにし、どのように分野ごとの調整をするかということがもっとも難しく、核となる人物が必ずや必要である。そのためには、仕事・役割の分担という組織作りから順に始めるべきである。今回は、そのような組織作りがないまま始まってしまったので、調整がとれていない部分が多々あり、批判を受けても仕方がないと思う。

（図 2）釜と桶のものがたり

テーマ	資料内容	所　蔵
民具ってなに？	・Ｓ字状口縁台付甕、内耳鍋などの考古資料と民俗資料の釜。	一宮市博物館
博物館に民具がやってくる	・整理前の土人形と資料整理後の土人形	一宮市博物館
観察してみよう/衣類の素材	・木綿長着、アンギン	一宮市博物館 個　　人
観察してみよう/道具の素材	・ヤマブドウ製テゴやマタタビ製のシンノミザル、ヤマザクラ製オイナワ、シナノキ製のミナワ、サワラ・コウゾ・アサの茎を使ったのステギなど、植物を使って作った民具	個　　人
あそぶ（2階民俗展示室）	・双六、手まり、凧、グイチ、石けりなどの遊びの道具	一宮市博物館

（表 1）展示資料一覧

自然部門

自然と人とのかかわり

企画担当者●加藤貞亨（鳳来寺山自然科学博物館）
藤原直子（豊橋市自然史博物館）

企画の趣旨

人は昔から自然の中で暮らし、資源としてさまざまに利用することによりその恩恵を受けてきた。身近な日常生活で使われる道具から芸術品にいたるまで自然とのかかわりは深く、私たちはそれらなしに生きることはできない。しかし、現代は人工的なものや仮想的なものが身の回りにあふれ、生活の中での自然とのかかわりが実感できなくなっている。

今回は他部門の展示と関連のある自然史資料を紹介し、人により加工がなされる前のそのままの姿を直に観て実感できる展示とした。自然の中で得られる素材の特質を知り、経験を積み重ねて巧みに生かし、利用してきた人々の知恵を感じ取れるようにすることを目的として企画した。

内　容

自然部門の展示は他部門の展示資料の原料や素材となっているものを中心に選んだ。考古、美術、歴史、民俗各分野と関連づけた内容であり、様々なテーマの各展示を結ぶ位置づけであったといえる。

動物標本のうち貝類と魚類、植物のさく葉標本、岩石・鉱物標本はケース展示としたが、これ以外の大型の標本はパーティションのみとし、間近にみられるよう直接展示した。手が触れられそうな距離に大きなシカ、イノシシが並ぶ様子はかなりの迫力である。また、地味になりがちな植物の展示は、長さ1～1.5mある樹幹、ツル性木本を直径50cmをこえる輪に巻いたものなど大型の標本を用いることにより、印象の強いものとできた。

他部門の展示との具体的な関わりを示すため、クイズ形式のパネルを設置した。

「これはなににつかわれているかな？」という問いかけの書かれた表のパネルをめくると、答えがみられるしくみとした。クイズパネルは問題とする資料に添えて膝下程度の低い位置に設置し、子どもによる利用をねらった。答えは、他部門に関連した展示があるものを中心とした。

クイズ一覧

○サヌカイト（安山岩）、下呂石（石英安山岩）、松脂岩、黒曜石、チャート
答：やじり（石鏃）
○蛇紋岩、橄欖岩
答：石斧（おの）
○孔雀石、辰砂
答：岩絵の具、顔料
○シカ
答：骨は漁をするための道具、毛皮は衣服やにかわ、毛は筆の穂、角は石器を作るハンマーや斧
○イノシシ
答：肉は食用、毛皮は服や敷物
○タヌキ、イタチ、リス
答＝筆の穂
○コウゾ、ガンピ、ミツマタ
答：かみ（和紙）
○アカガシ、シラカシ
答：くわの柄
○ミズナラ、アベマキ
答：炭焼き
○ハチク
答：イカキ
○カラムシ
答：衣類（アンギン）
○アケビ、ツヅラフジ、マタタビ
答：カゴ、テゴ、縄

展示資料

○地学標本○
・鳳来寺山自然科学博物館蔵
サヌカイト（安山岩）1
下呂石（石英安山岩）1
松脂岩（凝灰岩）1
黒曜石1
蛇紋岩1
橄欖岩1
孔雀石1
辰　砂1
・豊橋市自然史博物館蔵
チャート1
○動物標本○
・鳳来寺山自然科学博物館蔵
シカ（オス）1
イノシシ（オス）1
イノシシ（幼獣）1
タヌキ1
イタチ2
リ　ス1
・豊橋市自然史博物館蔵
アサリ3
ハイガイ2
ハマグリ2
マガキ2
・個人蔵
クロダイ1
マダイ1
○植物標本○
・鳳来寺山自然科学博物館蔵
マダケ（稈）1
オカメザサ（稈）1
ハチク（稈）1
ヤダケ（稈）1
カマツカ（樹幹）1
ウリカエデ（樹幹）1
スギ（樹皮）1
シナノキ（樹幹）1
ヤマブドウ（つる）1
マタタビ（つる）1

コウゾ（樹幹）1
ガンピ（樹幹）1
ミツマタ（樹幹）1
シラカシ（樹幹）1
アカガシ（樹幹）1
・豊橋市自然史博物館蔵
カラムシ（さく葉）1
ツヅラフジ（つる、さく葉）1
アケビ（つる、さく葉）1
マタタビ（つる、さく葉）1
コウゾ（さく葉）1
ガンピ（さく葉）1
ミツマタ（さく葉）1
シラカシ（さく葉）1
アカガシ（さく葉）1
ミズナラ（さく葉）1
・個人蔵
アベマキ（さく葉）1

今後の課題

この動物・植物・石から、こんな物が作り出せるというおどろき。普段から馴染みの資料や道具の素がじつはこんな物であった、初めて見たというはっけん。展示に携わった学芸員が感じたそれは、専門家の独りよがりではなく、一般の観覧者にとっても面白いに違いない。なぜなら、各自の専門分野以外ではどの学芸員も基本的には素人、一般の観覧者と変わりがないからである。

私がみた間では、ほぼ全ての観覧者が、展示室入り口で出迎えるシカ剥製の前で足をとめていた。子や孫に向かって、「シカさんだよ、イノシシだよ」と話しかける保護者が少なくない。シカの骨など遺物よりも、絵画の中のシカよりも、実物のシカはわかりやすい。導入に自然史の資料を使うという切り口は間違っていないと思う。今回はそれをもっと磨いて使う余地がまだあったと感じた。今後のとりくみに具体的な参考となるよう、反省点を挙げたい。

第一に、クイズの設問と回答の案を“回答”側の学芸員からも出してもらうべきだった。ここが“連携”のしどころであったと、展示がおおむね形になったあとであらためて感じた。例えば、イカキはどうしてマダケやモウソウチクでなく、ハチクという竹でつくられるのか。自然史の担当が出来るのは、正しいハチクの実物とその生物学的な説明を準備するところまでである。“何に”使ったかは書けたとしても、“どうして”それに使ったかまでを書くことは難しい。この解説をより充実させたかった。

また、クイズパネルの意図と見方をわかりやすく伝える導入があると効果的だったかもしれない。自ら展示に入り込んで、能動的に観てくれる観覧者なら、パネルによる指示などなくても多くのつながりを発見してくれただろう。ひとりひとりに自発的に観てもらって初めて得られる発見と感動があると思う。本来それがのぞましいとも思う。しかし、そのような観覧者の数は必ずしも多くはない。クイズを楽しんだだけでクイズで伝えたかったことは見てもらえなかった、という事も起こりがちであり、注意が必要だが、確実にクイズと答えの物同士のつながりがわかるようなサインを設ける、誰にでも答えがわかる親切な三択クイズにする、などの方法も考えられた。

最後に、資料の扱いについて気づいた点を述べる。岩石標本は、じかにふれられるように展示できる稀な資料である。今回はケース内の展示となったが、利点を活かせる見せ方を工夫できるとよかっただろう。また、多くの植物標本を展示したが、これらは特に虫害に弱い。同時に虫の発生源となって他の資料へ影響を及ぼす可能性があるとも言える。今回は、植物標本周辺に虫害のモニタートラップを設置して監視するよう配慮した。展示室内へにおいがでるなどの悪影響がないよう、可能な範囲では防虫剤を使用するなどの対応が必要である。また、場合によっては展示室への搬入前に燻蒸を行っておくことも有効かもしれない。

さまざまな特性の資料を同時に展示する際には、ほかにもまだ思いついていないような注意すべき事項があるかもしれない。　（文責　藤原直子）

写真はすべて展示風景

遊びのワークショップパネルの展示

（愛知県児童総合センター／1996年から2002年の活動から）

企画担当者●田嶋 茂典・鈴木 理（愛知こどもの国 育成環境課）

企画の趣旨および内容

愛知県児童総合センターは、私たちの未来を担う子どもたちが健やかに逞しく感性豊かに育つことを願って、平成8年7月に開館した新しいスタイルの「県立大型児童館」である。開館以来6年間、「アート」「自然」「映像」「身体」「食」「コミュニケーション」などさまざまなテーマをもとに、子どもたちが五感をいっぱい働かせて感じるきっかけとなる『遊び』のワークショップを展開し、従来の『遊び』の概念にとらわれない内容を多くの子どもや親たちに提案してきた。

この愛知県児童総合センターで開発をし、実践してきた遊びのプログラムの中から、23のプログラムの内容を紹介するパネルを会場入口通路に展示した。（パネル内容は一覧表参照）

この愛知県児童総合センターは、現在愛知万博工事のため休館中だが、昨年4月よりその事業の一部を幡豆町にある「愛知こどもの国」で引継ぎ実施している。愛知こどもの国には新しく《あそびのへや》を開設し、小さな子どもから大人までが新たな視点で身の回りの「もの」や「こと」に出会う遊び場を目指してプログラムを展開している。また、さらに大府市の「あいち健康の森公園」でも《ウイークエンド児童総合センター事業～あそび・たんと・テント》を、毎週土・日曜、祝日に開催中である。その他、県内各地を巡回する「移動児童館事業」、子育て支援や遊びの「情報誌の発行」、児童健全育成に関わる人たちへの研修会の開催などさまざまな事業を実施している。

展示パネル

テーマ1　わたしのさいぼう／身体
テーマ2　ひふのかべ／身体
テーマ3　てのひらメジャー／マイ･メジャー
テーマ4　たいけんのどうくつ／マイ･メジャー
テーマ5　ウゴキエール／映像
テーマ6　ペタペタイル／コミュニケーション
テーマ7　土の宇宙／自然
テーマ8　サンド･ボディー･ドローイング／自然
テーマ9　大きな木をかざる／自然
テーマ10　どろ手どろ足／自然
テーマ11　忍じゃるツアー／自然
テーマ12　あなをほる／自然
テーマ13　スゴロクQ／コミュニケーション
テーマ14　トラトラトラリー／コミュニケーション
テーマ15　ボン･バ･ボーン／コミュニケーション
テーマ16　めざせいろいろ星人／コミュニケーション
テーマ17　モグモグの木／食･クリスマス
テーマ18　チャレンジマート／食
テーマ19　チャレンジマート2／食
テーマ20　ホットケ山／クッキング
テーマ21　とうふ？！／クッキング
テーマ22　ひろがりマスク／クッキング
テーマ23　ぺっだんご／クッキング

（文責　田嶋茂典・鈴木理）

展示風景

ワークショップ

伝えるということは？

～学芸員が贈る子どもたちへのメッセージ

○○○○○○○○○○○○○会場○○一宮市博物館

民俗部門「つくって遊ぼう！」

陶芸部門「さわって、感じて、作ってみよう！」

歴史部門「おてがみ道場」「江戸時代の遊び」

考古部門「縄文人になろう！」

美術部門「いろんな絵の具をためしてみよう！」

遊び部門「おしゃべりなロープ」

「ワークショップ総集編」

○○○○○○○○○○○会場○○愛知県陶磁資料館

陶芸部門「さわって、感じて、作ってみよう！」

○○○○○○○○会場○○鳳来寺山自然科学博物館

自然部門「ひな祭りのひし餅をつくろう」

○○○○○○○○○○○会場○○豊橋市美術博物館

考古部門「体験！弥生生活」

民俗部門

つくって遊ぼう！

日時●平成15年1月12日(日)午前10時～12時と午後1時～3時
場所●一宮市博物館　参加者数●480人以上　募集方法●当日、時間内に随時参加
企画責任者●久保禎子(一宮市博物館)　講師●手まり・人形作成…脇田節子(藤橋村歴史民俗資料館)
スタッフ●加藤啓子(徳川美術館)、佐藤一信(愛知県陶磁資料館)
川島正二・前田利昇・下出至子・小笠原優子・奥村幸恵(一宮市博物館)、奥村泰美、息野美世子
映像撮影●宮下十有

趣旨と概要

人は、暮らしている自然環境の中で、周りにある土、植物や動物などさまざまなものを利用し破壊して生きている。そのことの意味を、子どもにとってもっとも身近な「遊び」を通して考えさせ、自然環境維持の重要性、うまく付き合っていく方法、これまで生きてきた祖先の負の遺産も含めた業績や知恵を伝えようとするものである。

内　容

全体を6つのブースに分けて実施した（図1）。

(1) 手まりをつくろう
…アサリに小石やアズキを入れて綿で包み、綿糸で巻いて製作する。綿から糸を紡ぎ、自分で紡いだ糸を挿入して模様にする（写真1）。

(2) ヤマブキであそぼう
…ヤマブキの芯を竹で突いて抜く遊び（写真2）。

(3) 草で人形をつくろう
…草を使って人形の形にする。髪は丸髷ではなく、現代の子どもたちに合わせて三つ編みにし、リボンを結んだ。

(4) ワラで刀をつくろう
…イネワラの節を利用して、刀を製作する。鍔は、包装紙を丸く切ったもの。

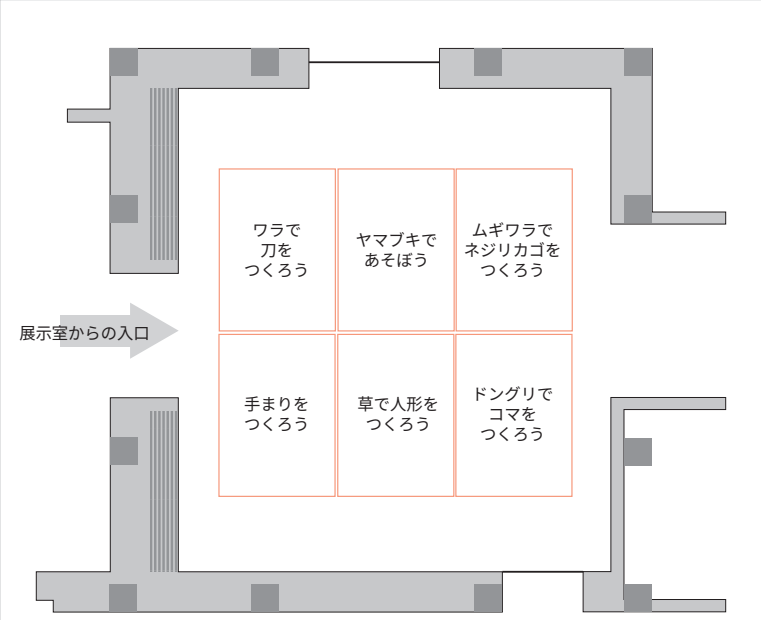
(5) ムギワラでネジリカゴをつくろう
…オオムギ（コムギも使う）のワラ（ムギカラと当地方では呼称）で、ムシカゴとして利用されたり、女の子が木の実を入れるのに使ったりしたカゴを製作する（写真3）。

(6) ドングリでコマをつくろう
…コナラやアベマキなどのずんぐりむっくりしたドングリに、細い棒（今回は爪楊枝で代用）をさしてコマを作り、まわしてみる（写真4）。

実施状況

今回の事業では、リーフレットを愛知県内各地に送付するとともに、特に一宮市周辺地域については児童に1枚ずつ、各学校のご協力を得て配布した。一宮市博物館を会場とする7つのワークショップ募集方法は事業概要に掲載したとおりであるが、民俗ワークショップが初日だったこともあり、有料入館者（小学生未満は無料）だけで480人が来館し、126平方メートルの講座室は騒然となった。それぞれのコーナーの所要時間に大きな差があったため、停滞する場所ができ、待ち時間が生じることによる開催側の焦りと、待っている側の怒りが錯綜する形となった。問題点としてまず挙げられるのが、以下の4点である。

1. 幼児も含め、600人ほどであったろう来館者数を予測できなかったこと。
2. 所要時間の異なるものが併存してい



（図1）講座室ワークショップ配置図

（写真1）手まりをつくろう

ることによる、人の流れの停滞を予測できなかったこと。

3. 手まりなどの製作に時間を要する講座は、今回のような事前申し込みを行わない方法をとる場合の内容として不向きであること。
4. 1つのコーナーにスタッフが1～2人しか配置できなかったという、スタッフの不足。

大きな問題点は、以上である。とくに、リーフレットの配布量が通常より多く、反応が即現れた点ではうれしい悲鳴であった。しかし、本来やろうとしていた、子どもたちと語り合いながらワークショップをするという目的・方法が、人をさばくので精一杯という状況になり、何もできなかった。ムギワラの話、木綿の話、ドングリの話など本当は話したいことがたくさんあった。そして、糸紡ぎをする余裕など全くなかったのである。

参加者の感想

このワークショップでは、アンケートがとれなかった。

今後の課題

あまりの人数のため、手まりの製作をさせてもらえず泣きじゃくる子ども。自分が担当する場所を守るので精一杯だったスタッフ。反省の多い講座であったが、入館者数について言えば、これまで民俗担当の学芸員として仕事をしてきて、はじめて経験した参加者数である。一宮市博物館では、夏休みに実施している「子どものための尾張歴史講座」というのがある。平成13年に、お祭りを調べようという企画「いちのみや子ども祭り調査」という企画をしたことがあるが、参加者がなく、講座が成立しないこともあった。民俗の分野とは、それほどの認知度である。

長い時間をかけて、ゆっくり語り合いながらできる本当の意味でのワークショップが目標である。しかし、実際に「博物館を知ってもらう」「博物館に来てもらう」「負も含めて先人の遺産を伝えたい」という思いは、少人数の対応だけでは駄目ではないかと、最近では考えている。

これからは、少人数の深いワークショップと、多人数のイベント的な普及活動の両方を兼ね備えてできる学芸員が必要ではないかと思っている。伝える何かがあってこそ研究であり、残す何かがあってこそ調査である。それを、より多くの人に伝えるのも、我々の義務である。とくに、これからを背負う子どもたちに、人がこれまで生きてきた軌跡をこれからも伝えていきたい。

（文責　久保禎子）

（下／写真2）ヤマブキであそぼう
（右上／写真3）ムギワラでネジリカゴをつくろう
（右下／写真4）ドングリでコマをつくろう

陶芸部門

さわって、感じて、作ってみよう！

日時●平成15年1月19日(日)午前10時～12時と午後1時～3時
場所●一宮市博物館　参加者数●84人　募集方法●当日(人数制限あり)
企画責任者●佐藤一信(愛知県陶磁資料館)　講師●西村陽平氏(造形作家・日本女子大学教授)
スタッフ(制作補助)●島田　篤、鯉江　明、中村　崇、松原竜馬、角田　淳
スタッフ●久保禎子・下出至子・奥村幸恵(一宮市博物館)、奥村泰美　映像撮影●宮下十有

趣旨と概要

「さわって、かんじて、作ってみよう！」は、粘土を用いるプログラムである。参加者が視覚を遮ることで視覚に大きく頼った造形から離れ、視覚以外の触覚や聴覚などの身体感覚を生かし、新鮮な刺激を体全体で感じ取って表現する楽しさを得ることを目的としたものである。このプログラムは、西村陽平氏が長年教鞭を執られた千葉県立盲学校での図工の授業から得た経験を生かし、そして氏が全国各地でおこなってこられたワークショップを基本としている。筆者は、2001年に愛知県陶磁資料館を会場に西村氏を招き、「さわって、かんじて、作ってみよう！」と題し、これを鑑賞と造形を繋ぐワークショップと位置づけて実施した。造形だけではなく、鑑賞と繋ぐというのは、参加することにより、感じる気持ち・意識の変化という点において、造形と鑑賞の両方にてそれを体験することで、両方の関係にも気づいてほしいとのねらいからである。従って、2001年の際は、西村氏のワークショップに加え、愛知県陶磁資料館の所蔵品を中心とした体験型鑑賞プログラムを筆者が担当して、1日で完結するひとつのワークショップとした。しかし、今回のワークショップでは、時間、参加者など様々な制約から、筆者所属館の体験型鑑賞プログラムは外し、西村氏のワークショップのみをおこなった。

内容および実施状況

○事前準備

・材料などの準備
粘土600kg、野菜（ブロッコリー、ピーマン、チンゲンサイなど)、アイマスク、粘土切り糸等

・会場設営
ブルーシート敷き、テーブル固定（ベニヤ天盤貼り付け)、椅子へのビニール被せ等

○当日

当日以前の変更点について補足すると、このワークショップはパンフレット配布当初は午前・午後各親子10組20人（計40人）での実施を予定していたが、展覧会開催直前に一宮市博物館と協議し、参加できる人数を増やすため、子どものみで計80人に対応することとした。また、これも当初は予定にはなかったが、定員を超えて入りきれない来館者が出ることを想定し、筆者はワークショップ会場外で作品のガイドなどをおこなうこととなったため、講師の西村氏のプログラムと筆者のプログラムを各1時間ずつおこなうというプランから変更があったことを補足しておきたい。このため、筆者は、当日のワークショップのすべてを見ていないことも付け加えたい。

当日、参加者が来る前に、西村氏と制作補助スタッフ全員とのミーティングをおこなった。さらに、事前に筆者が西村氏の著書をスタッフに渡し、また、筆者所属館での実施した際の話を伝えておいた。西村氏からは注意点などが説明された。

さて、開始時間前には、すでに40人を若干超える参加者とそれを取り巻いて見学している保護者がおり、会場はやや窮屈であった。講師の紹介にはじまり、プログラムの内容について西村氏が20分ほど時間をかけ、しっかりと説明をおこなった。次に参加者全員にマイクを回し、自己紹介をしてもらう。作品制作、そして、出来上がった作品をお互いに触って鑑賞するところまでアイマスクをつけたままでおこなうので、参加者全員に簡単な自己紹介をしてもらう。そして制作の前に、まず棒状の粘土の固まり5kgを机に叩き付けながら四角い形に整えてもらう。参加者がやっと粘土に触れ、リラックスする時間でもある。それからアイマスクを付けて制作に進む。幼稚園年中組の子どもが2人、アイマスクを付けなかったが、あとの参加者は付けた。アイマスク着用は慣れない状態なので強制はしない。プログラムは30分程度で2回おこなう。

1回目は手渡した野菜を触って作るプログラムで、1人に1個、ピーマン、ブロッコリー、チンゲンサイなどを渡して作ってもらう。視覚を遮っての制作にとまどい、また、おそらくは学校で扱う以上の粘土を前にどうしようかと悩む姿も見られた。講師の西村氏は作り方を説明したりはしない。参加者の意識を触っている野菜に集中させるように補助するといった姿勢である。各机についたスタッフも声をかけ、参加者全員が作り始める。30分は意外に早く過ぎてしまう。作品制作を止める。しかし、このまま終了ではなく、アイマスクをしたまま、他の人の作品を触って鑑賞する。ワイワイ、ガヤガヤとしながらも一生懸命、他の人の作った形を触る。

2回目はある音を聞いて、そこからイメージしたものを作るというものである。今回は発泡スチロールの薄い小片をたくさん落としたときの音を用いた。何の音かは告げずに作り始めてもらうのだが、視覚を遮っての制作にな

れていない参加者たちは、木琴やトライアングルなど、実際の楽器の形を作る参加者も多かった。しかし、お互いの作品を触った後の感想では、「北極のこおりがぶつかったような音だと思った」と音のイメージを述べた参加者もいた。

ほぼ、同じ流れで午前と午後の２回のワークショップを終えた。

参加者の感想

- 他のこどもと親しくできたのがよかったです。
- 感じることのむずかしさがわかりました。大人もやってみるといいなと思います。
- またうちでもやりたいです。
- おにいちゃんたちといっしょにあそべてよかった。
- 手話や点字をやってみたいです。小学校１年ぐらいに使ったねんどとちがってすごくおおきかった。おもくて大変だったけど楽しかったよ
- 手話をやりたい。目をかくしてねんどを使ったのは初めてだったので、不安だったけどたのしかった。
- ねんどがかたくてつくるのがたいへんだった。
- 大きい粘土は初めてでたのしかったそうです。
- たくさんのねんどを自由に使えて楽しかったです。
- とてもおもしろかったです。
- とても楽しかった。また来たい。
- とてもたのしく、この機会を通していろいろなことをやってみたいです。
- またこのような（楽しいこと）やってほしい
- 今まで目かくししてねん土であそんだことがなかったので楽しかったです。
- いろんなたいけんをした。
- ふだん体験できないことができてとてもいいと思いました。
- 楽しかった。
- また来たいです。
- またやって。
- 子供にとってとても貴重な体験だったと思います。ふだん家庭ではできないような事がうれしいです。ありがとうございました。ぜひ、機会がありましたらこさせていただきます。
- ねんどがすきになった。むずかしかった。
- すごく楽しかったです。また、こんどもやりたいです。
- すごく楽しかったです。また、こんどもやりたいです。楽しくておもしろかった。あとねんどはおもしろいなーと思った。
- また、ねんどあそびであそびたいです。
- おもしろくてうんーとやりたい。
- 人の物をきにせずつくれたことがよかった。
- とてもたのしくて、それでじゆうのときにでんしゃをつくりました。
- じぶんのつくったのがへんだった。
- 音をねんどでひょうげんするのがむずかしかった。
- いっぱいいろいろな形にできたから楽しかった。
- 私は目をかくして物を作ったり、自分で考えて物をつくるということは初めてだったので楽しかったです。

今後の課題

後述の会場愛知県陶磁資料館ワークショップを参照。

（文責　佐藤一信）

さわって、かんじて、作ってみよう！当日風景

歴史部門

おてがみ道場・江戸時代の遊び

日時●平成15年1月26日(日)午前10時～12時と午後1時～3時
場所●一宮市博物館　参加者数●197人　募集方法●当日
企画責任者●加藤啓子(徳川美術館)、淺野弘子(名古屋市博物館)
スタッフ●伊藤　孚・加藤た美子・佐伯裕子・鶴見和子・本間久子・伊藤路子・鬼頭夏子・高橋真理・富田沙織(徳川美術館ボランティア)、水野知枝(荒木集成館)、久保禎子・奥村幸恵(一宮市博物館)、奥村泰美　映像撮影●宮下十有

「江戸時代の遊び」（写真1～4）

趣旨と概要

徳川美術館からは、歴史ワークショップとして「江戸時代の遊び」を実施した。同館は徳川家康をはじめ、尾張徳川家藩主らの遺愛品や道具を収蔵、展示公開している。館内では小中学生を対象に、大名文化を紹介するためのワークショップを数々企画し、実施している。その中から「作って遊ぼう貝あわせ」と「殿様の遊んだすごろく」を、一宮市博物館「伝えるということは？」のワークショップのひとつとして開催した。

内　容

徳川美術館でのすべてのワークショップは同館ボランティアが進行、対応している。今回もボランティアに、ワークショップの進行をお願いした。

「貝あわせ」は平安時代から伝わる遊びで、江戸時代の姫君らも遊び、道具は婚礼調度でもあった。

内容としては、まず、貝あわせの歴史や道具、さらに遊び方を紹介した。次に子どもたちが実際に「貝あわせ」で遊んだ。その後、蛤の貝殻の内側に油性のペイントマーカーで自由に絵を描き、合わせ貝を作成した。

約10人を1組として、15分間、説明し、遊びを実施、次の15分で合わせ貝作りを行った。2組目は1組目が合わせ貝作りの開始と同時に、解説を始め、一組目が合わせ貝が出来上がった頃、合わせ貝作りを始めた。以後同様のペースで実施した。午前・午後とも開始当初は参加者が多く、1回に20人あまりの参加があり、2組に分かれて、解説と遊びを実施したが、後半は人数も減り、10人以下で、ゆっくりと実施することができた。ボランティアは解説の経験が豊かで、子どもたちに優しく、わかりやすく対応できた。

子どもたちは「貝あわせ」の遊びでは、真剣に参加し、合わせ貝も思い思いの絵をのびのびと描いていた。貝殻の数の関係で、2度の参加は断ったが、2回の参加を希望する子どもがいた。

「殿様の遊んだすごろく」は、同館の所蔵品で尾張徳川家十三代藩主慶臧の遺品のうち、紙双六「子ども出世すごろく」を復元したものを使用した。江戸時代の町人の出世を示しており、ふりだしからサイコロをふって、上がりの「長者」を目指し、1回5人から10人で実施した。1人が「長者」に達したところでゲーム終了とした。子ども達は飽きることなく、楽しみながら「仲働」「若衆」「番頭」「旦那」など、江戸時代の町人社会での身分や階級を学んだ。いづれの企画も子どもたちには好評で、江戸時代の遊びに親しめたと思う。

参加者の感想

- とってもたのしかったです。またやりたいです。
- いろんな昔の遊びをおしえてもらってとても勉強になり、また楽しかったです。
- 学芸員のかたが親切にていねいにわかりやすく説明をしてくれて楽しく参加することができました。これからもこのようにいろんな事をもっともっと企画してください。是非また来たいです。
- いろんなことが分かってとてもよかった。これからもいろんな遊びをしたい。

今後の課題

遊びで使用した貝桶がレプリカであったため、一人の保護者から「子ども向けとはいえ、誤ったものを使用するとはけしからん。」との指摘があった。貝桶は大変高価で、取りそろえるのが難しい。「貝あわせ」については歴史資料に基づき実施したが、入門のワークショップに、限られた予算で、どこまで揃えるか課題の一つとなった。

徳川美術館が名古屋市内に位置することから、ここでのワークショップの参加者は市内の子どもたちだが、今回は、一宮を中心に尾張の子ども達が多数参加し、ワークショップの拡大ができた。

また、他の美術館・博物館の職員と活動することで企画、運営などをお互い勉強する良い機会であった。それらを参考に、各美術館・博物館の特色を生かした、館独自の企画、開催に努力し

（写真1～3）
「江戸時代の遊び」

たい。　　（文責　加藤啓子）

「おてがみ道場」（写真５・６）

趣旨と概要

現在では電話をはじめ電子メールなど、多くの伝達手段が生まれており、直接文字を書いて相手へ届ける「手紙」は、改まったものとして子どもたちにはなじみにくいものとなっている。展示の中で紹介した書状類も、基本的には手書きの一見改まった形式のものだが、それらを書くにあたっては実はちゃんと当時も「マニュアル」があり、それに従って文面を作っていけば誰でも粗相のない手紙を書く事ができた。この「マニュアル」の基本になるのが相手に対する礼儀であり、心遣いであったはずである。今回のワークショップでは、江戸時代以前の様々な手紙のかたちを紹介し、相手への配慮を文面にあらわすにはどんなポイントに気をつければよいのかを、「古文書」の字面にとらわれず体験してもらうことを目的とした。

内　容

大きく３つのコーナーを作り、参加者に自由に参加・体験してもらった。

1. 手紙の材料を知ろう

料紙となる楮紙・斐紙・雁皮紙サンプルを提供し、手ざわりや墨での書き味を体験してもらう。参考として宿紙・檀紙のサンプルも用意し、実際に触ってもらった。サンプルは全て現代に作られたものを使用したが、なるべく状態・風合いが近いものを選んだ。

2. 手紙の折り方・包み方

切封・折封・捻り封をそれぞれ体験してもらう。料紙は楮紙を使用。

3. パズルで手紙の文面つくり

最厚礼から命令調のものまで４段階の内容の手紙の文面を虫食い状にしたパズルを用意した。「はじめのあいさつ」「本文」「最後のあいさつ」「日付」「相手の名前」「自分の名前」をそれぞれピースにし、内容や礼儀の厚さによってふさわしいもの・ふさわしい位置を選んではめ込んでいく。文面は江戸時代の往来物に実際に出てくる文例を用いたが、すべて現代語に改めた。

準　備

材料／配布用和紙（楮紙・斐紙・雁皮紙）
書状サンプル（折紙折封・竪紙切封・竪紙捻封）
筆ペン・筆・墨・墨汁・硯・下敷き用毛氈
文面パズル４種(パネルにて作成)

実施状況

「1. 手紙の材料を知ろう」のコーナーでは、原料の実際の姿である楮や三椏の枝が自然分野の展示で出品されていたため、「もともとはあんな木だったんだよ。皮を取るとこんな風になってね…」と積極的に展示内容と関連づけて解説することができた。

「2. 手紙の折り方・包み方」では、当初折る・包む体験だけを目的としていたが、促すと筆をとって自作の手紙を作ろうとする子どもが多く、「お父さん」「お母さん」宛に力作を完成させたので驚いた。

「3. パズルで手紙の文面作り」では、文面に少し漢字を残してしまい、小学校低学年には難しい内容になってしまった。高学年になると「大事な人に出す手紙にはあいさつを丁寧にね。」「相手の名前は自分より上に書くのが基本ね。」などのヒントがつかめると、一つのパズル（文例）を完成させるだけではあき足らず、全てに挑戦して制覇しようとする子もいた。「恐々謹言」「草々」といった書き止め文言は敢えて現代語にせず、読めなくても「記号」として認識してもらい、この「記号」の違いが礼の厚薄につながることだけ解説した。やや乱暴な説明になったことは否めないが、「何が失礼で何が厚礼になるのか」を知ることを通して、相手に意思を伝えることの難しさと重要性を知るきっかけを作り出せればと考えた。

今後の課題

コーナー１と２は、実際に和紙を使ってその特徴を感じ取りながら、むかしの手紙の形を作ってもらうというものであった。コーナー３は応用編のようなもので、パズル感覚で楽しんでもらえたらとの思いで企画したが、このコーナー３で取り上げた手紙のなりたちを参考にし、コーナー２で子どもたちが文面から自ら竪紙・折紙にしたためるという流れを作ることもできた。一生懸命「はじめのあいさつは…」と文面をねりながらようやく手紙を完成させ、切封をしてから笑顔で「帰ってお父さんに渡す」と語る子もいて、手紙の楽しさや奥の深さを少しでも感じてもらうことができたのなら幸いである。

ただ準備不足から各コーナーの流れや関連をふまえた上での計画ができなかったこと、パズルはコツが掴めず「つまらない」と一蹴する子もおり、一層の工夫が必要だったことが大きな反省点である。また解説で作ったパネルなども、実際にはなかなか活かせなかった。　　（文責　淺野弘子）

（右／写真４）「江戸時代の遊び」
（中／写真５、左／写真６）
「おてがみ道場」

考古部門

縄文人になろう！

日時●平成15年2月2日(日)午前10時～12時と午後1時～3時
場所●一宮市博物館　参加者数●254人　募集方法●当日
企画責任者●岩瀬彰利(豊橋市美術博物館)、水野知枝(荒木集成館)
講師●土本典生(一宮市博物館)、水野裕之(名古屋市見晴台考古資料館)、纐纈　茂(名古屋市見晴台考古資料館)、岡安雅彦(安城市歴史博物館)、平岩里張(安城市歴史博物館)、李　浩季(安城市歴史博物館)、原田　幹(愛知県教育委員会)、山崎　健(名古屋大学大学院)
スタッフ●加藤啓子(徳川美術館)、久保禎子・川島正二・下出至子・奥村幸恵(一宮市博物館)、奥村泰美　映像撮影●宮下十有

企画の主旨と目的

考古担当の展示が縄文時代を対象としているため、ワークショップはこれと関連づけた内容とした。子どもにとって、縄文時代という言葉は教科書などで習っていても、その時代の暮らしは殆ど教えられてはいない。このため、当時の主食、服装、住居がどのようなものかは知らされていない場合が多い。そこで、当時の主食であるドングリを試食する、縄文服を着る、石器でものを切るなど、縄文人の暮らしに密着した企画内容を考えた。来場した子どもに縄文時代の生活様式を復元した体験学習を行い、縄文人になりきってもらうことを目的とする。

ただ、展覧会に伴うワークショップのため、子どもの来場時間、人数が掴めない。このため、いつ訪れても簡易な体験学習ができるよう、会場に常時ブースを設置する。また、会場内に講座広場を設置し、時間を区切って深く体験してもらう講座も開設する。来場した子どもがすぐ参加できる体験ブースと、時間をかけてじっくり行う講座の2種類を実施することとし、何らかの体験学習に参加でき、気軽に縄文時代の生活様式を学べるように配慮した。

参加者の感想

- とても楽しかった。
- おもしろかったです。またやってみたいです。
- むかしの生活がたいけんできてとってもよかった。もっともっとむかしの人の生活をしりたいです。人間はおかねやものがなくてもみんなできょうりょくしたら、楽しい生活が送れると思います。
- 石器で切るのがおもしろかった。
- 布をつくるのがとても楽しかったのでまたやりたいです。
- じょうもんじだいはどうぶつや石などをりようしていろいろなものを作っていることがわかりました。
- 講座でやれる人がもっとたくさんできるといいなあー。
- いろいろな体験ができ勉強になりました。
- 昔の人はたいへんだったと思った。土器をつくりたかった。
- 写真がよかった。
- スペースが狭くちょっと残念。青少年公園へよく通っていたため同じような想像をしていました。
- むかしのことがわかった。
- みんなが気軽に参加できるようにしてください。体験コーナーをもっとつくってください。
- 前回来た時よりとてもごうかになっていました。たべたりできてよかったです。いつもは食べたりしなかったけど、おいしかったしよくわかった。
- 今回はまえよりごうかでした。きゅうりできるなんてしらなかった（少々誤解が生じている)。どきはおもしろかった。
- 縄文時代のことがよくわかった。とりあげてほしいことはいろいろなこうさくを作りたい。
- いろいろなことを体験できて良かったと思う。もう少し参加人数が多いといいと思いました。
- 土器をあらうときちょびっとむづかしかったけど、じょうずにできました。
- じょうもんのアサリ、ふつうのおみそしるよりもおいしかった。じょうもんは重いけどあったかかった。
- じょう文服とかきたら少し重たかったけど、あったかかった。いい体験だった。生のどきをもってよかった。楽しかった。
- 縄文時代にこんな物があったなんてびっくりしました。
- またきます。

日程

9:00　スタッフ集合（当日準備）
10:00　ワークショップ開始（～12:00）
(1) 縄文食をたべよう (2) 魚や貝を調べよう (3) 石器を使おう (4) 縄文服を着よう (5) 縄文文様をつけよう (6) 土器をさわってみよう・洗ってみよう
11:00～12:00
講座・縄文土器をつくろう(定員10人)

（写真1）縄文食をたべよう

（写真2）魚や貝を調べよう

（写真3）石器を使おう

12:00　昼食
13:00　ワークショップ再会（～15:00）
13:00～14:00
　講座・縄文布を編もう（定員10人）
14:00～15:00　講座・石器をつくろう
　（定員10人、半分ずつ交互に実施）
15:00　終了・撤収

企画内容

　会場には常時ブースを設置し、来場者に気軽に体験してもらう。設置ブース及び内容は以下の通り。

○体験ブース

（1）縄文食をたべよう（写真1）
実施方法／縄文時代の食物として、ドングリと干し貝を学芸員の指導のもとに食べる。またパネルを使って作り方などを説明する。（講師／水野知・李）
準備／ドングリは事前に採集しアクを抜いておいたものを当日に粥にし、コップにいれて来場者に渡した。干し貝は、ハマグリの天日干しを食べてもらった。食品を扱うため衛生面に配慮し、保健所指導のもとに食品を直接触らないように注意した。

（2）魚や貝を調べよう（写真2）
実施方法／食料残滓である魚骨を、実体顕微鏡を覗いて観察し、魚骨の形態や特徴を学ぶ。骨の特徴から魚種がわかり、それによって当時の海洋環境もわかることを説明する。（講師／山崎）
準備／実体顕微鏡は全てレンタル。魚骨や貝などの動物遺体は、遺跡出土のものを用いた。

（3）石器を使おう（写真3）
実施方法／モノを切る－復元石器を置いておき、学芸員の指導のもとモノ（キュウリなど）を切り、切れ味を味わう。（講師／水野裕・纐纈）
準備／使用石器は、講師が下呂石を用いて当日製作。
使用痕を観察する（写真4）－石器はモノを切ると刃部に傷が付く。これを使用痕と呼ぶ。使用痕は切るモノによって傷の付き方が異なった。切削物の異なる使用痕を画像付顕微鏡で覗いて観察する。更に、自分で石器に付けた使用痕を観察させた。（講師／原田）
準備／使用痕付石器と画像付顕微鏡は講師が用意。更なる観察用の実体顕微鏡はレンタル。

（4）縄文服を着よう（写真5）
実施方法／復元した縄文服を学芸員指導のもとに試着し、アクセサリーなどを着け縄文人に変身する。手には本物の縄文土器をもち、洞窟住居が写ったバック紙の前で写真を撮る。撮った写真（ポラロイド）は記念品とする。また、アンギン編台も置いておき、実際に編むことができるようにした。（講師／平岩）
準備／子どもに着させる縄文服は、同じ編み方の越後アンギンを十日町市博物館から3着借用して代用。首飾りや腕輪などのアクセサリーは、イノシシの牙や石で新たに作製。写真背景は、大きく引き伸ばした洞窟住居（嵩山蛇穴遺跡）の写真を飾った。アンギン編台を、編める状態にして設置。

（5）縄文文様をつけよう（写真6）
実施方法／粘土版を置き、縄文原体を転がしたり、貝を押し引いたりして、文様の付け方を学ぶ。縄文土器の写真も添え、どのような施文具を使って文様がつけられているかを知ってもらう。（講師／岡安）
準備／粘土は講師が用意。施文原体（縄、棒、竹管、貝など）や土器写真パネルは新たに作製。

（6）土器をさわってみよう・洗ってみよう（写真7）
実施方法／さわってみよう－縄文土器を置き、実際に持ち上げたりしてさわってみる。形の違いで用途が異なることや施文文様について説明する。（講師／岩瀬）
準備／縄文土器には、水神第2貝塚出土の深鉢・鉢・皿を用意。
洗ってみよう－机に水洗セットを置き、遺跡出土の土器を実際に洗浄させ、土器の質感や洗い方を学ぶ。（講師／土本）
準備／水洗には、豊橋市内の立会調査で出土した土器（縄文～中世）を使用。水洗道具は新たに揃えた。

○講座

　人数を限定して、深く体験してもらう。1時間程度の時間で完結する内容。

（1）縄文土器をつくろう（写真8）
実施方法／予め砂と調合済みの粘土をこね、小型の縄文土器を製作する。野焼きは、参加できる子どものみを対象にして3月に行う。（講師／岡安）

（2）縄文布を編もう（写真9）
実施方法／アンギン編台を用いて、縄文布を編む。時間が限られるため、カラムシは予め撚っておき、編む作業を体験する。（講師／久保）

（3）石器をつくろう（写真10）
実施方法／下呂石を打ち欠いて石器を作成する。石材は予め粗割をしておき、鹿の角で敲打して加工する。（講師／水野）

今後の課題

　今回のワークショップでは、通常は時間をかけ行うような内容を、簡素化して体験ブースと位置づけ、常時参加できるように工夫したのが特徴である。故に、混雑時でも並べば参加でき、多量の人数をさばくのには適していた。だが、それ

（写真4）使用痕を観察する

（写真5）縄文服を着よう

（写真6）縄文文様をつけよう

とともに内容が簡略化されすぎた部分もあった。以下、実施内容毎に反省点及び今後の課題を述べよう。

○縄文食をたべよう

来場者の人数を多く見積もっていたため、汁の具材としてドングリを用いて使用量を少なくした。ただ、実際には遺跡から出土するドングリ類はクッキー状のものが主体であることから、固形タイプも用意する必要があったかも知れない。干し貝は、子どもに限定して配ったが、来場者数が予想を下回ったため、多くが残ってしまった。味についてはドングリや干し貝は比較的好評であった。食品を扱うため食中毒には細心の注意を払ったが、食物体験はワークショップには不向きであると感じた。

（写真 7）土器をさわってみよう・洗ってみよう

（写真 8）縄文土器をつくろう

（写真 9）縄文布を編もう

（写真 10）石器をつくろう

○魚や貝を調べよう

企画当初は、自由に魚骨を調べてもらえればと考えた。しかし、多人数に対応できない点と資料が小さく脆い点から、仕方なく複数の実体顕微鏡にそれぞれ部位の異なる魚骨を固定し、指定した部位を探すというクイズ形式に変更せざるをえなかった。

石器を使おう:デモンストレーションとして、石器製作を常時実演し、その場で作った石器でキュウリを切ってもらった。子どもたちは切れ味に興味があったようで、1時間ぐらいキュウリを切り続けた子もいた。一方、画像付顕微鏡を用いて使用痕を観察するブースでは、扱う内容が難解であったためか、子どもというよりは、大人の方が熱心に観察していた。

○縄文服を着よう

縄文人に変身して記念写真撮るという企画が受け、常時行列ができる程に人気があった。ただ、多数の人が並んだため服を着せる作業に追われ、当時の服装や装飾品についてのレクチャーが十分にできなかった。

○縄文文様をつけよう

縄文原体を転がすと文様が付くという原理に触れて、全般的に興味深く文様付けをする子どもが目立った。施した文様が縄文土器に付いていることを説明したが、贅沢をいうと写真パネルではなく、各文様が施してある本物の縄文土器で説明することができたら理解しやすかったのではと感じた。

○土器をさわってみよう・洗ってみよう

本物の縄文土器を触るという機会はめったにないが、いざ実施してみると子どもには余り評判はよくなかった。逆に資料の価値がわかる大人には好評という結果になってしまった。土器の用途を説明して触ってもらったが、もう少し何か工夫をする必要があったと反省した。一方、土器洗いの方は楽しいようで、真剣な表情で洗浄する子どもの姿も見受けられた。ただ、丁寧に洗浄したので時間がかかり、用意した土器の1/10程しか洗い終えなかった。

○縄文土器をつくろう･縄文布を編もう･石器をつくろう

これらの講座は通常は半日以上をかけて行うものである。ところが1時間と短時間にしたため、料理番組のようにある程度できた材料を使って完成させるという、「おいしいとこ取り」をさせる結果になってしまった。土器・石器をつくる・布を編むという原理は教えることができたが、そこまでたどり着くまでの準備（ex．粘土の調合・カラムシのオコキ・下呂石の荒割）＝苦労を知らせることができなかった点は企画者としての反省点である。

企画してみて

当初は「縄文まつり」とネーミングしようと考えたように、縁日のような「まつり」をイメージして企画した。来場した子どもたちが楽しみながら縄文ワールドに浸ってもらおうと考えた訳である。子どもたちの反応は良かったものと思え、会場は博物館とは思えないような騒々しさであった。ただ、一堂に会した分、一つ一つの講座が持っている内容の奥深さが伝えられなかった点はマイナス要因である。

この企画に際しては、様々な批判があるものと思う。実際に、アンギンは暖かくなかったとか、前日に行った文様付けのデモンストレーションで使用した紙粘土に対する批判など、批判の一部は企画者にも伝わっている。確かに細部では実施内容が詰め切れなかった部分もあり、その点は反省しているし、そのような批判は甘受しなければならない。しかし、このワークショップに対する絶対的な評価権は子どもの側にある。いくら大人に評価されたとしても、参加した子どもに受け入れられなくては、何にも意味がないのである。その逆に大人に評価されなくても、子どもに評価されれば、今回のワークショップの目的は達成できたといえよう。我々は、押しつけではなく子どもたちが五感を使い、自主性を持って参加できるワークショップを研究し続け、更に単発ではなく今後も継続して開催することの必要性を感じた。

最後に、多数のワークショップを一堂に行ったということと、各館学芸員が得意な分野を生かして講師となり、共同で教えることができたことは企画者として満足であり、その意義は大きいものと考える。　（文責　岩瀬彰利・水野知枝）

いろんな絵の具をためしてみよう

日時●平成15年2月9日(日)午前10時～12時
場所●一宮市博物館　参加者数●26人　募集方法●当日先着順
募集対象●小学校高学年25人程度で行うことを前提に準備。企画責任者(講師)●山田美佐子(稲沢市荻須記念美術館)、橋本久美(高浜市やきものの里かわら美術館)、阿野文香(はるひ美術館)
スタッフ●久保禎子・下出至子(一宮市博物館)　映像撮影●宮下十有

趣旨と概要

絵画作品を鑑賞して、絵を描く道具の様々とその効果の違いを認識。これらをふまえた上で実際に油絵・日本画の画材を体験し、絵の具の原理を理解する。また、絵を描く道具も自然からの賜物であることを学習する。

事前準備

2003年1月25日／ワークショップ打合せ会を稲沢市荻須記念美術館で開催。
・ワークショップの進行と役割分担についての確認。
分担／解説・まとめ＝山田
顔料・日本画材の指導＝橋本
油絵画材の指導＝阿野
・所要時間と実技内容を3人で把握し、全員体制で指導に入れるようにするため画材を使い当日の流れに沿って実験。
・大人でも時間がかかることがわかったので 子どもの力では無理なこと、当日の朝では間に合わないことの準備を分担。(鉱石の大まかな粉砕 膠の用意　等)

○ワークショップ概要

1. 受付、あいさつ、メンバー紹介
2. 解説
展示室にて荻須、佐分、棟方、梅逸を鑑賞。
3. 実技
A. むかしむかしの絵の具[顔料]をつくってみよう
B. むかしむかしの絵の具をためしてみよう
C. 日本画の絵の具をためしてみよう
D. 油絵の具をつくってみよう
4. まとめ

○用意した主な材料

・鉱石（マラカイト）
・岩絵の具　数種類
・麻紙
・膠
・顔料（ローシェンナ）
・リンシードオイル他　画用オイル類
・チューブ入り油絵の具セット
・0号サイズ　カンヴァス
・その他　乳鉢、筆、皿、紙パレットなどの画用道具類

※5人で1卓とする。筆、カンヴァス、麻紙、乳鉢(棒付)、皿、紙パレットは1人1個ずついき渡るように用意。絵の具類、筆洗などはグループで使用。

内　容

(1) 受付、ワークショップ内容の解説
(2) 展示作品の鑑賞と解説
展示室に移動し、動物の剥製や鉱石等の展示の前で、これらが画材の原料になり得ることを紹介。
また、油絵（荻須・佐分）、版画（棟方）、日本画（梅逸）を鑑賞し、異素材であることから生れる作品の印象の違いに注目させる。
(3) 実技　(レジュメを配布)

A. むかしむかしの絵の具[顔料]をつくってみよう

≪作業手順≫
乳鉢と乳棒を使い鉱石を細かくつぶして顔料をつくる。
≪材料・道具≫
・鉱石、乳鉢、乳棒、茶こし　など
≪目的≫
・チューブ絵の具が当たり前の現代からは想像できない手間のかかる絵の具作りの作業を体験する。
・同じ原料でも粒の大きさで少しずつ色がちがうことに気付く。

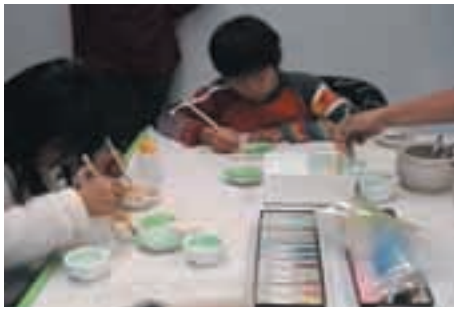
B. むかしむかしの絵の具をためしてみよう
C. 日本画の絵の具をためしてみよう

≪B、C作業手順≫
絵皿にAで作った顔料をいれ膠をスプーンで適量加え、指で練る。⇒水差で適量の水を加えてさらに指で練る。⇒筆につけて麻紙に塗ってみる。⇒さらに市販の岩絵の具を使って同様の作業をする。
≪B、C材料・道具≫
・Aでつくった鉱石の粉、岩絵の具、新岩絵の具、膠、彩色筆、麻紙　など
≪目的≫
・岩絵の具や膠など学校教材では使わない日本画材を体験し、古来日本の絵に使われてきた材料を知る。

D. 油絵の具をつくってみよう

≪作業手順≫
ガラス板の上に計量した顔料(ローシェンナ)を盛り上げ、調合したオイルを適量加え、ナイフ、練り棒で練る。⇒講師が練る実演を行う傍ら、ローシェンナ（黄土色）を加熱すると色が濃くなり、バーントシェンナ（こげ茶色）に変わるところを見せる。⇒ある程度絵の具らしくまとまったところで子どもたちを集め、少量を練らせる。⇒作った絵の具をグループ毎に分け与え、カ

いろんな絵の具をためしてみよう


いろんな絵の具をためしてみよう

ンヴァスにペインティングナイフや筆で描いてみる。⇒チューブ入り絵の具を使ってカンヴァスにペインティングナイフや筆で描いてみる。

≪材料・道具≫

・リンシードオイル等画用オイル、顔料(ローシェンナ)、紙パレット、油彩用筆、ビーカー、ステンレスボウル、カンヴァス、ペインティングナイフ、ガラス板、ガラス製練り棒　他

≪目的≫

・水彩絵の具との質感の違いを実感し、油のにおい、なめらかさ、水をつかわないことなど油絵の具の特徴を実体験する。

・自作の絵の具と市販のものの違いを感じる。

（4）まとめ

色の粉を使う点ではどれも同じであるが、展色剤と溶剤が異なり、それによって支持体も異なるということを改めて説明。

絵の具の特徴を知った上で、展示室にて絵画作品を再度鑑賞してもらうように促した。

今後の課題

1. 参加者について

高学年25人を目安に募集した。材料に幼児が口にすると危険なものが含まれることと、作業内容が一連のものであること、消耗品を無制限に用意することは不可能と判断したことが理由なのだが、他の分野のワークショップと比べると募集に制約が大きかったようだ。予想以上に人が集まった上、自由に参加できると考えた希望者が多く、受付時に多少混乱がおきた。

また、内容も、高学年で理解できるものを念頭においていたので、低学年は付添いの保護者が手助けをして進めていた。しかし、保護者がカメラやビデオでの撮影に熱心なあまり進行の妨げになる場面もあった。また、この他「見学」と称して入室した人たちへの対応など、会場側と私たちとの打合せが十分にできていなかったため、実際の来場者への対応という部分でやや問題を残す結果となった。

2. スタッフについて

メンバー３人の役割分担を明確にしておいたことと、一度実験をしておいたことで、自分の指導場面以外は「黒子」の役目を果たすことができた。（次の作業で必要なものをセッティングする、終えたものを片付けるなど）また、一宮市博物館のスタッフの方々、見学に来られて途中から自然にサポート役に加わってくださったトヨタ博物館学芸員の宗沢さんには大変助けていただいた。偶然にもこの日のスタッフは全員女性で、子どもの手や服についた絵の具を心配したり、成果品を持ち帰るためにデパートの紙袋を用意するなど細かく気を配って、保護者からも「至れり尽せりねえ。」という声が。

3. 時間について

最初の解説に約10分、実技Ａ～Ｃを50分、Ｄを50分（これは片付けに多少時間を費やした）、まとめの解説に約10分という配分で、ワークショップ全体はきっちり２時間となった。Ａ～Ｃはやや急がせ気味に進めたがＤには十分な時間の余裕があり、ＣとＤの間にすこし時間を設け、理解度を確認すると良かったかもしれない。終了後再度の絵画鑑賞を促したが、再入場するかどうかは自主性に任せたため時間には加えない。

4. 材料について

今回使用した日本画の絵の具や画用油類は専門の画材店でしか手に入らない上に高価なものもある。めったにない機会、子どもにとって初めての画材なのだから本物に触れておくことが必要と考えたことによる。だが、発展させれば、身近なものでの絵の具作りも可能で、参加者が今後自分で工夫・発見していくことを期待したい。

また、刈谷市美術館が教育普及活動の中で蓄積してきた道具類を大いに活用させていただいたことを書き添えたい。

まとめ

今回、子ども向けとはいえ、かなり専門的な絵の具に触れるワークショップを企画してみたのは、学校教材向きではない画材を人生の内で一度でも体験してもらいたかったからである。そして絵の具の成り立ちのようなものを子どもなりにでも理解してもらいたかった。本企画展の大テーマ「伝えるということは」の中で、我々美術部門が目的としたのは画家が自分の思いを伝える為に画材を選択するということが、子どもたちのなかに取り込まれることである。いつか自分の好きな絵に出会ったときに、なんとなくでいいから今回の体験を思い出してくれることを望んでいる。

美術部門の展示とワークショップは、稲沢市荻須記念美術館の山田さん、刈谷市美術館の松本さん、はるひ美術館の阿野さんと私の４人で情報や知識、材料、そして時間を提供し合って進めてきた。展示作業も撤収も一緒におこなった。知らない間柄ではないにしろ、共同作業は初めてでとても楽しく刺激的だった。子どもと博物館研究会という繋がりが地域の異なる４館の学芸員にチームを組ませ、１人あるいは１館では考えているだけで実現し得なかったことを可能にしてくれたのだ。そういう意味では美術部門は大成功であったといえよう。　　（文責　橋本久美）

（左）展示室の見学
（中）日本画を描く
（右）油絵の具を練る

遊び部門

おしゃべりなロープ

日時●平成15年2月16日(日)午前10時～12時と午後1時～3時
場所●一宮市博物館　参加者数●164人　募集方法●当日、時間内に随時参加　対象●小さな子どもから大人まで
企画●愛知こどもの国　育成環境課(財団法人愛知公園協会)　企画責任者●田嶋茂典・鈴木　理（愛知こどもの国）
スタッフ●鈴木　理・大下琴子・梶　千春・水野雅美、加藤啓子(徳川美術館)、佐藤一信(愛知県陶磁資料館)、
久保禎子・下出至子・奥村幸恵(一宮市博物館)　映像撮影●宮下十有

趣旨と概要

『遊びのワークショップ』は、直接「役に立つ」「ためになる」ことを目的としない活動である。しかし、一見「役に立たない」「無駄な」行為のように見える活動が、未知の領域への視点を生み出す可能性を秘めているのではないか。さらにそこから発展して芸術、文化の世界に興味を広げる糸口が生まれるのではないかと考える。

今回の『伝えるということは？』展でのワークショップでは、ともすれば「視覚」による情報が中心となりがちな現代社会の中で、「触覚」を手がかりにして、他者に「自分が感じた気持ち」を伝えることができるかという遊びの試みをおこなった。意味のある『言葉』ではなく、呪文のような意味のない『音』をきっかけにすることで、好奇心をかきたて、想像力を働かせ、イメージを広げ、夢中になる。上手も下手もない、年齢を超えた非日常的な遊びの空間。そんな遊びが生まれる仕掛けや環境作りをおこなった。感じる遊び、表現する遊び、宝探しの遊びを合体させた「新しい遊び」から、身の回りの様々なものやことに興味を広げるきっかけを生み出すことを目的とした。

環境設定

〈手触りのロープ体験コーナー〉

ワークショップ会場入口に、約25種類の「触覚体験のためのロープ」を設置。（写真1・2）

〈文字パネル〉

ワークショップ会場、館内通路やロビー等の壁面に、24種類の文字と異なる手触りの素材を貼りつけたパネルを設置。

〈ビデオ撮影コーナー〉

集めた文字を記入した「音さがしテープ」をビデオカメラの前で読み上げ、それを撮影するコーナー。

用具・材料

〈てざわりテープ〉あらかじめ両面テープを貼り付けた帯状の厚口色画用紙。
〈音さがしテープ〉文字を記入していく升目を印刷した帯状の上質紙。
〈てざわりの素材〉触感の異なるさまざまな素材（24種類の内容は一覧表参照）
［てざわりテープ］と［音さがしテープ］のそれぞれ両方をつなぎ合わせて展示をして、両方で［おしゃべりなロープ］と呼ぶ。

内　容

遊び／その1「てざわりテープ」をつくる
（受付1）（写真3～5）

（1）トレーに種類別に用意したさまざまな素材を、手で確かめながら選ぶ。
（2）両面テープを少しずつ剥しながら色々な素材を貼り付けていく。何種類の素材を貼り付けてもよい。（一種類の素材はまとめて貼る。）

遊び／その2「音さがしテープ」(音の宝さがし)
（受付2）（写真5）

○1本の「てざわりテープ」ができたら、「音さがしテープ」の受付に移動。
（1）「てざわりテープ」に紐付きクリップをつけ、首からぶら下げる。
（2）「てざわりテープ」に貼った素材の数と同じ数の升目がついた「音さがしテープ」を渡す。
（3）「てざわりテープ」で選んで使った材料と同じ「文字パネル」を館内で探す。見つけた「文字パネル」の文字を「音さがしテープ」の升目に記入していく。
（4）すべての文字を探し終えたらワークショップ会場に戻る。

遊び／その3「ビデオ撮影」と「展示」（受付3）（写真6）
（1）ビデオカメラの前で「音さがしテープ」に記入した文字の呪文を発表する。（「音さがしテープ」の文字を声にしてみよう！「テープからどんな、おしゃべりが聞こえてくるかな？」）
（2）みんなの「てざわりテープ」と「音さがしテープ」をそれぞれつなぎ

左から（写真1）会場入口、（写真2）触覚体験のためのロープ、（写真3）「てざわりテープ」の説明、（写真4）トレーに種類別に用意したさまざまな素材

おしゃべりなロープ

（右／写真５）色々な素材を貼り付けていく
（左／写真６）「音さがし」に出かける

合わせた「おしゃべりなロープ」を会場内に展示する。（写真７～９）

（3）（1）で大勢の参加者を撮影したビデオを上映する。

素材の種類と文字の一覧表

1. 食品発泡トレー（約３×３にカット）：りゅ
2. 麻布（園芸用麻テープ5cm幅約3cmにカット）：も
3. コルクシート（約３×３にカット）：ゆ
4. アルミホイル（約３×３にカット）：か
5. 羽根：ひゅ
6. 波ダンボール（約３×３にカット）：た
7. エンボスダンボール（約３×３にカット）：な
8. サンドペーパー（約３×３にカット）：じゃ
9. 綿（小さくちぎって丸めておく）：ふぁ
10. 麻ロープ（約5cmにカット）：ま
11. 梱包材エアパッキン（約３×３にカット）：ぷ
12. シュロシート（園芸用品5cm幅約3cmにカット）：ご
13. 経木（約３×３にカット）：き
14. 葉っぱ（いろいろ）：す
15. 梱包用ビニールテープ（各色約5cmにカット）：しょ
16. 小枝（約3cmにカット）：みょ
17. 布（ボア・約３×3cmにカット）：わ
18. 布（タオル・約３×3cmにカット）：て
19. スポンジ：にょ
20. 鏡面紙（約３×３にカット）：あ
21. 人工芝（約３×３にカット）：ざ
22. 保温材（約３×３にカット）：ちゅ
23. 紙(絵の具付)（適当な大きさに破る）：は
24. 梱包材ミナホーム：る

参加者の感想

- さわったかんじがよくておもしろかった
- いろいろな手触りのロープがあっておもしろかった。いろいろな手触りのざいりょうをロープにつけるのがおもしろかった。
- とてもさがすのがたいへんだった。17文字のじゅもんがながくてあまりおぼえれなかった。
- 博物館がめいろみたいでたのしかったです。またこんどやりたい。
- ３歳の子どもがある程度参加できてうれしかったです。
- 今、五感を使うことの大切さが見直されています。そういう点でとてもよいワークショップだと思いました。大人も子どもも楽しめた。
- いろいろなさわりごこちのテープがあってびっくりしました。
- かみにはったのをさがしにいくのが楽しかったです。
- じをさがすのがたのしかった。

今後の課題

触覚から感じた気持ちを「言葉」にすることは難しいことである。そこであらかじめ１つの素材の触覚に「文字」を割り振ったカードを用意し、それを探し集めていくことで「呪文」を作るという方法をとった。遊びを仕掛ける側が、触覚に対する「文字」をあらかじめ決めておくという形をとったことで、自由に表現をするという点では制約を受けることになるが、ゲームのルールのひとつとして理解されることで、小さな子どもでもスムーズに活動に参加できたと思う。

また、作為的、意図的な行為をほとんど加えないで、ただ単に両面テープをはがしながら素材を並べて貼るだけという気楽さも参加意欲を高めることにつながったのではないかと思う。

さらに、周囲に参加者が大勢いる中で、「呪文」を発表する様子をビデオカメラで撮影されることに、参加者が恥ずかしがったり照れたりするのではないかと心配したが、皆堂々と「ハレの場」の緊張感を楽しんでいたことに驚いた。

「選ぶ」「貼る」「探す」「発表」するという変化のある要素が一連のプログラムの流れにあり、毎回異なる発見が生まれることに魅力を感じたのか、参加者は何度も繰り返し楽しんでいた。

参加者全員の「てざわりテープ」と「音さがしテープ」を次々と繋げていくことで、賑やかな雰囲気の会場へと変化をしていった。ビデオに撮影し上映をすることで、単に「視覚的なロープ」にとどまらず、「形のない、見えないロープ」の空間も生まれたように思えた。

しかし、さまざまな場面での声かけやビデオ撮影、展示等、工程がふえるほど人手がかかる内容になってしまった。「子どもと博物館研究会」のメンバーの方々の積極的なサポートのおかげで、スムーズにプログラムを進行することができた。

（文責　田嶋 茂典・鈴木 理）

（写真７）「音さがしテープ」の文字を声にしてみよう！

（写真８）「おしゃべりなロープ」にする

（写真９）つなぎ合わせた「おしゃべりなロープ」

ワークショップ総集編

日時●平成15年2月23日(日)午前10時～12時と午後1時～3時
場所●一宮市博物館　参加者数●354人　募集方法●当日
企画責任者●久保禎子(一宮市博物館)　講師●手まり作成…脇田節子(藤橋村歴史民俗資料館)
スタッフ●佐藤一信(愛知県陶磁資料館)、高橋真理・本間久子・鶴見和子・伏原昭子(徳川美術館ボランティア)
川島正二・前田利昇・下出至子・小笠原優子・奥村幸恵(一宮市博物館)　映像撮影●宮下十有

趣旨と概要

これまでの7つのワークショップの中で、材料に余裕のあったもの、人気のあったものなどを選んで実施した。

内　容

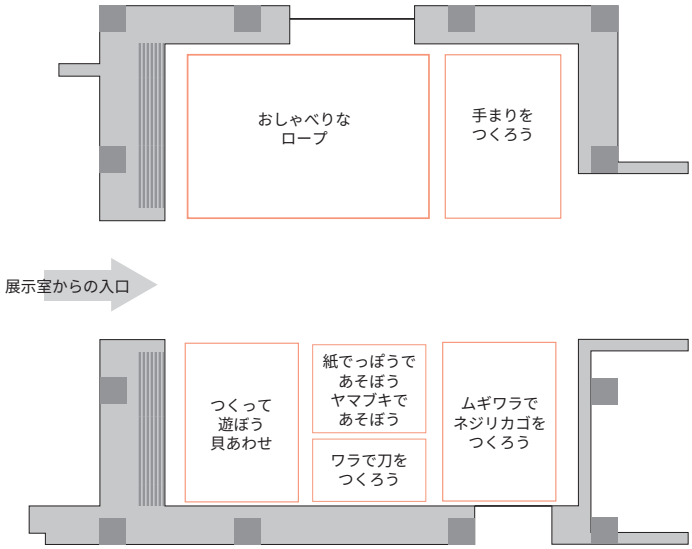
全体を6つのブースに分けて実施した（図1）。
(1) つくって遊ぼう／貝あわせ（写真1・2）
(2) おしゃべりなロープ（写真3・4）
(3) ヤマブキであそぼう
(4) 紙でっぽうであそぼう（写真5）
(5) ワラで刀をつくろう（写真6）
(6) ムギワラでネジリカゴをつくろう
(7) 手まりをつくろう（写真7）

実施状況

全ての分野を一つずつできるとよかったが、それぞれの担当学芸員が参加するのが難しく、可能な範囲での実施となった。全体としてのまとまりはなかったものの、なぜか入館者数は初日に次いで多い結果となった。

参加者の感想・今後の課題

参加者の感想の中に、「絵の具の講座以外全てに参加させていただいきました。親子とも楽しいひとときでした。子どもが博物館にきたことはなく、ワークショップ以外に興味を示したことがうれしかった。今後ともこのようなイベントを当館で開催して頂き、来館したいと思います。子どもにいろんなことを体験させるいい機会でした。」というものがあった。これまであまり博物館に来館されたことがない、小さなお子さんを持つ方々が、「博物館に小さな子どもを連れて行ってはいけない」という一つのハードルを越えて来館してくださっている様子が、全体を通してわかった。そして、毎週見る顔が増えるとともに、スタッフもだんだんうれしくなっていった。「あの子、また来てるよ。」「先週よりいい顔してるよ。」などと、勝手に子どもを観察しながら。



（図1）講座室ワークショップ配置図

（写真1・2）
つくって遊ぼう／貝あわせ

このような経験は「毎週」という苦しさの中から生まれる喜びであり、苦労をしたご褒美のような気もする。「毎週毎週よくやるな…。」という陰口も聞こえてきたが、子どもの笑顔とその保護者の顔のあたたかさに支えられた。非常に感情的な表現であるが、我々も人間である。もらってもっともうれしいのは満足した子どもの笑顔である。

今回は、その笑顔だけでなく、募集方法のミスによる怒りの顔や、どうしても参加したくて来たにもかかわらずできなかった悲しみの顔、いろいろな顔と出会い、自らの不甲斐なさを思った。より多くの、参加したいと思う子どもたち全員を参加させてあげられる事業を目指していきたいものである。

（文責　久保禎子）

（写真 3・4）おしゃべりなロープ

（写真 5）紙でっぽうであそぼう

（写真 6）ワラで刀をつくろう

（写真 7）手まりをつくろう

陶芸部門

さわって、感じて、作ってみよう！

日時●平成15年2月9日(日)午前10時～12時、午後1時～3時
場所●愛知県陶磁資料館　参加者数●10組23人　募集方法●事前申し込み
企画責任者●佐藤一信(愛知県陶磁資料館)
講師●西村陽平氏(造形作家・日本女子大学教授)
スタッフ(制作補助)●島田　篤、鯉江　明、中村　崇、松原竜馬、角田　淳、槇原太郎、浅井比呂代
写真撮影など●愛知県陶磁資料館職員2人

趣旨と概要

先述した一宮市博物館を会場とするワークショップの報告を参照。

内容および実施状況

○事前準備

・材料などの準備
…粘土800kg、野菜（ブロッコリー、ピーマン、チンゲンサイなど）、アイマスク、粘土切り糸、磨き工程用スプーン等。
…作品を黒陶に焼成するため、磨きの工程を説明、体験してもらうための粘土板（10cm角）を前日に作成（参加者全員分）。

前回の一宮市博物館でおこなったプログラムとは異なり、参加者をかなり少人数に限定し、しかも親子を2人を1組とした。さらに午前と午後を合わせてひとつのワークショップとし、一宮市博と同様の2つのプログラムを午前におこない、午後は（後日）焼いて残す作品制作と、たくさんの土を使ってとにかく大きく作るという2つのプログラムをおこなった。また、最後にワークショップのおまけといったかたちで、千葉県立盲学校の生徒が作った作品を鑑賞した。

午前中の制作は一宮市博物館編で紹介したので、ここでは午後のプログラムについて述べる。野菜、そして音を用いてのプログラムは、時間をかけて作り込むことより短時間に集中して作ることで、出来上がる作品よりも、感じて作る過程、あるいは、気持ち・意識の動きを重視したプログラムと言える。しかし、一方で作品を焼成し、やきものとして完成させることを参加者が期待していることにも2001年の経験から対応しなければならないと考えていた。そこで、これも従来から西村氏がおこなっていた黒陶（焼成時に炭素を吸着させ黒色に仕上げる）のための制作をおこなった。

握り拳大の粘土の中には粘土の玉を入れ、焼成すると音がする鈴のようなものを作るのだ。制作後、半乾きの表面をスプーンでよく磨くことでつるつるとした仕上がりとなる。この磨きの工程は会場で体験してもらい、制作した作品は各自自宅へ持ち帰り、後日各自で磨く。その後、愛知県陶磁資料館で焼成した。

午後のもうひとつのプログラムは、参加者ひとりひとりが、なるべくたくさんの粘土を使って、大きく積み上げて形を作るものである。粘土切り用糸で板状に切った粘土を張り合わせてゆくことで驚くほど短時間で、しかも、簡単に大きく積み上げてゆくことが出来るため、参加者の目がもっとも輝いた時間でもあった。またそこで出来上がる形は、指跡を多く残したり、逆に、粘土板がかろうじて張り合わされて粘土自体の重みで歪んだ形であったり、まさに現代の陶芸作品を地でいく造形なのである。しかし、残念ながら、今回は所蔵作品の鑑賞プログラムはおこなわなかった。こうして午前、午後合わせて4時間というまとまった時間でのワークショップを終えた。

今後の課題

上記の一宮市博物館と愛知県陶磁資料館でおこなった両方の反省を述べる。まず、反省点のひとつは、展覧会とワークショップとの関連が充分でなかったこと。「伝えるということ」をテーマに展示作品を選定したが、ワークショップの方は最終的にはほぼ西村氏の従来やってこられたものをそのままに実施しただけで、筆者がねらった「伝えること」は「あらわすこと」「表現すること」という部分が出せなかった。こ

（写真1）野菜をさわって作る

（写真2）野菜をさわって作る

（写真3）野菜をさわって作る

れは同時にワークショップ全体への反省にもつながる。各ワークショップを縦断するテーマがなかったこと。繋がりが全く見出せなかったことである。

次に、一宮会場では、参加希望者が殺到する事態も予測されながら、筆者が会場の制約等を配慮しなかったために、実施直前に大きな変更を余儀なくされた。より多くの参加者を受け入れることに変更したために講師の意識が参加者全体に充分届かなかった部分もあったかと思われ、これも筆者が配布パンフレット時点で参加者数を明示しなかったことによる失敗であった。

これもワークショップ全体に関わる反省として、学校の先生や児童教育・美術館教育について研究している美術館以外の方々に参加していただけなかったことは大変残念である。こうした複数の美術館・博物館が連携する機会こそ逃すべきではなかった、と現在も大変反省している。今後の課題として、外部の方を受け入れやすい組織づくりも挙げられる。

反省の一方で、成果もあった。以前から筆者所属館の子ども向けプログラムに協力をしていただいているスタッフが、今回のワークショップも力強いパートナーとしてサポートしてくださったことが、筆者にとって今後の活動への明るい展望のひとつである。こうした人材の養成とサポート体制の強化も引き続きおこなっていきたい。

今回のような大規模な委嘱事業を単独で受け、実施することは公立館にとって不可能に近い。この貴重な機会にめぐまれたことに感謝し、もう一度、ワークショップの記録DVDを見直し、より良いワークショップのための糧としたい。　　（文責　佐藤一信）

（写真 6）音をきいて作る／感想を話している参加者

（写真 9）大きく作る

（写真 7）音をきいて作る／左側が作品

（写真 10）千葉県立盲学校生徒作品の鑑賞

（写真 4）音をきいて作る

（写真 5）音をきいて作る

（写真 8）大きく作る

（写真 11）音のするやきもの　焼成後

自然部門

ひな祭りのひし餅をつくろう

日時●平成15年3月2日(日)午前10時～午後2時
場所●鳳来寺山自然科学博物館　参加者数●小学生女子17名、小学生男子7名、中学生女子1名　募集方法●抽選
企画責任者●加藤貞亨(鳳来寺山自然科学博物館)
講師●小椋克好(鳳来寺山自然科学博物館友の会会長)
スタッフ●森下雅代、清尾友紀(鳳来寺山自然科学博物館)、久保禎子(一宮市博物館)、佐藤一信(愛知県陶磁資料館)
映像記録●宮下十有

趣旨と概要

古来より3月3日の節句には、女児のいる家庭ではその児の幸福・成長を祈って雛人形を飾り、ひし餅や白酒、桃の花などを供えてお祭りをしてきた。この講座では、少し前まで各家庭で普通におこなわれていた餅つきを、当時の道具を用いて再現し、ひな祭りのひし餅作りを体験する。

そして臼、杵、蒸篭、のし板、のし棒など、実際に使用する道具をとおして木材の特質を生かしたそれぞれの道具の質感や使い勝手を体感する。
また、ひし餅の材料として、赤い餅にはインドネシア・バリ島在来の紫黒米に日本のモチ米を交配した日本型

紫黒米を用い、草餅には参加する子どもたちが自分で採集してきたヨモギを使用することにした。

草餅に使うヨモギを採集するためには、ヨモギがいかなる草か、今の時期にはどのような姿をしているのかといった情報収集と識別眼が必要となる。そのために家の人などに教わりながら、田畑や野原に出かけて探しださなければならない。そのなかでヨモギをはじめとして、さまざまな植物の姿を観察し、早春の自然を肌で感じてくることを期待した。

内　容

○日程

10:00　博物館集合、あいさつ
　　趣旨説明と講師の紹介
10:05　ひな祭りの由来と歴史の説明
10:15　餅つきに使う道具の説明
10:30　各自で採集したヨモギの選別
10:40　餅つき作業とのし餅作り
　　御殿飾りの飾り付け
12:30　昼食と休憩
13:00　ひし餅切り
　　さまざまな日用品に利用されている木の説明
14:00　終了、解散

○準備

・講　師：講師は曽祖父が木地師で、ご自身も樹木に造詣の深い、鳳来寺山自然科学博物館友の会会長の小椋氏にお願いした。ひな祭りと雛人形の解説は一宮市博物館の久保氏に担当していただいた。
・道具類：餅つきに関する道具類は小椋氏が所有し、家庭で使っているものを使わせていただいた。
　…餅つき臼（欅）、杵（白樫・欅）、蒸篭（桧）、のし板（杉）、のし棒（桐）、せいろ敷き布、手水桶（サワラ）、笊（真竹）、釜、かまど等。
・食　材：白、赤、緑のひし餅と試食用の4臼分のもち米、紫黒米を用意した。ヨモギは各自持ち寄った。試食用に餡子、黄粉、大根、醤油などを用意した。

実施状況

ひな祭りを翌日にひかえ、青く晴れ渡った空の下での開催となった。
博物館のベランダに据えられた臼と桶と杵を囲むように参加者が集合。

はじめに、一宮市博物館学芸員の久保氏が雛人形とひな祭りの由来について解説した。

お雛様の始まりとして、ひいな遊びとして古くから子どもがおままごとのよ

（写真1）餅つき道具を前に小椋氏の話

（写真2）ヨモギの選別風景

（写真3）餅つきのようす

うにして人形で遊んでいたことや、ひな型の紙人形や土人形に諸々の罪や汚れや病魔などを封じて水に流す、流しびなの風習があったことなどをあげて説明した。

江戸時代になって３月３日の桃の節句と流し雛が結びつき、少しずつひな祭りの下地がつくられていったこと、雛人形も簡素なものから徐々に華美になり、段飾りや御殿飾りなどが登場するようになってきたこと。一般庶民は土雛などを飾ってひな祭りを祝ったことなどの説明があった。

つづいてこのワークショップで使用する餅つきの道具と、その道具の材質について小椋氏が解説した。

今回使用する臼はケヤキ製であり、水に強く非常に丈夫な材である。餅が冷めにくく、きめの細かな餅がつきあがるなどの点で優れている。この地方では花崗岩による石臼が一般的であるが、北設楽郡ではトチの木の臼がよく使われた。

杵は柄の部分にシラカシが使われている。シラカシはアカガシより材が白いのが特徴。カシ類の材は硬く丈夫であるため、農具などの柄にも使われている。

蒸篭はヒノキが使われている。ヒノキは火の木といわれるように着火しやすい。水に強く優れた建築材として広く使われている。1300年以上経つ法隆寺の五重塔もヒノキで造られている。

のし板に使われているスギは真直ぐな木なので直木（すぐき）からスギになったと言われている。柔らかな材で加工がしやすい。橋脚や和船はスギが使われていることなど、例を挙げながらの解りやすい解説であった。

次にもち米が蒸しあがるまでの時間を使って、参加者が自分の家の近くで事前に採集してきたヨモギの選別を行なった。

子どもたちの採集袋から出てくるものが、果してヨモギか否か多少の不安があったが、他の植物は全く混入しておらず、硬い茎の部分や枯葉を除去するだけで済んだ。詳しく訊ねることはしなかったが、おそらく家の人たちと一緒にわいわいと語りながら、ヨモギ摘みに出かけたのであろうと推察する。中にはツクシやフキノトウなども見つけたよと報告してくれる子どももいた。

期待したねらいどおりの結果であり、うれしく微笑ましかった。また、ヨモギも想像以上の収量であった。

さて、いよいよ餅つきである。１臼目は小椋氏と加藤が手本を示す意味で、餅つき作業とのし棒を使ってのし餅にする作業を実演した。餅つきの体験者が数名いたが、初体験の子どもたちには全体の作業の流れを理解した上で体験するほうがよいと考えたからである。子どもたちには、あらかじめ３班に分かれてもらい、赤餅、草餅、白餅の順に１臼づつついてもらうことにした。

紫黒米を使った２臼目は赤餅である。もち米１升３合に五分撞きの紫黒米３合を混ぜて一緒に蒸したものである。玄米の種皮に含まれる紫黒色の色素（アントシアン）をつきこむことによって餅全体が鮮やかな赤紫に染まることを利用して赤餅にするものである。

この班は低学年の女子ばかりであったため、重い杵をふり下ろすには補助が必要であったが、皆で交代しながら上手くつきあげることができた。

３臼目は草餅である。八分ほどつきあがったところで、子どもたちが採集し、茹でてあくをぬいておいたヨモギを入れた。ヨモギの量が多すぎてなかなか混ざらなかったが、やがて深い緑の草餅ができあがった。この班は経験者もいて、餅の返しやひとりで杵をもてる子もいた。一度でも体験を積んでいる子は自信をもって作業ができていた。

一方、他の班が餅つきをしている間に、久保氏の計らいで、一宮市博物館から持参してきた御殿飾りの組み立てをおこなった。久保氏の説明を聞きながら、薄紙に大切にくるまれた雛人形や御殿の部品を、ひとつひとつていねいに取り出して、慎重に飾り付けて完成させていた。これは女の子たちの独壇場であった。また、屋外ではヤマブキの髄をぬいて作るヤマブキ鉄砲が男の子に人気であった。

赤餅も草餅もひし餅にするために、

（写真４）のし餅つくり作業

（写真５）御殿飾りの組み立て

（写真６）試食風景

子どもたちで板状に伸したが、仕上げは手伝った。これで最初の白餅とあわせて３色ののし餅が揃い、ひし形に切るためにしばらく冷ますことにした。

３班の最後の臼はもち米だけの白い餅をついた。これは自分たちでついた餅を皆で試食するためのものとした。

つきあがった餅を取り分ける際には、子どもたちがわれ先にと群がり、まるで争奪戦のようになってしまったが、自分でついたお餅を一刻も早く味わってみたかったのだろう。

竹製のおろし器でゴリゴリとおろした大根おろしや黄粉、餡子、醤油ダレなどをつきたての餅につけ、思い思いの味付けをしてほおばっていた。格別の味であったと思う。

試食を兼ねた昼食と休憩の後、いよいよひし餅に切り分ける作業である。これは刃物を使うことと、のばした餅がまだほとんど固まっておらず、子どもたちで切ることが困難なため、加藤がひし形の治具と定規を使って定形に切り分けていった。

その間を利用し、小椋氏がさまざまな木製品とそれに使用されている樹木の材質や特徴などについて実物を示しつつ、楽しく解説を加えてくれた。

ひし形に餅が切り分けられると、下から緑、白、赤の順に重ねてひし餅の完成である。下段の草餅は大地の緑、中断の白は雪、上段の赤は春の桃の花をあらわしているとの解説を受け、最後に全員で記念写真を撮りワークショップを終了した。ひし餅は各自が持ち帰った。

後で聞くと、家の人に見せて早速自宅のおひな様にお供えしたり、すぐに食べてしまった子もいたようである。

今後の課題

タイトルとねらいにギャップを感じつつも進んでしまった観がある。しかし、子どもたちにとっては、餅つきという体験そのものを楽しみ（目的）に集まってきているので、企画者としては、餅つきという楽しい一連の作業の中で、いかに多くのものを感じ取ってもらえるように知恵を絞ったか、であると思うが非常に心もとない。

自然と人とのかかわりについて、今回はひな祭りのひし餅つくりにかこつけて道具として利用される樹木や食草をからめてみたが、樹木も実際に生えている姿を見に行ったり、枝を手折ったり削ったりして簡単な道具を自分で作ってみると、肌でその木の性質を感じ取ることができたであろう。

（文責　加藤貞亨）

（写真７）ひし餅

（写真８）集合写真

考古部門

体験！弥生生活

日時●平成15年3月23日(日)午前9時30分～午後4時
場所●豊橋市自然史博物館（開催場所：瓜郷遺跡）　参加者数●60人　募集方法●事前申し込み
企画責任者●岩瀬彰利(豊橋市美術博物館)
講師●太田好治(浜松市博物館)、岡安雅彦(安城市歴史博物館)、水野知枝(荒木集成館)、小林久彦(豊橋市美術博物館)、野口哲也(愛知県教育委員会)、水野裕之(名古屋市見晴台考古資料館)、天野幸枝(三河武士のやかた家康館)
映像撮影●宮下十有

趣旨と概要

豊橋市内には、弥生時代を代表する遺跡である国指定史跡の瓜郷遺跡がある。ここは公園になっており、一昨年に火災で焼失し、昨年10月に再建された竪穴住居が1棟建っている。しかし、遺跡公園は非常に狭くて駐車場も無く、今まで史跡活用がなされていなかった。そこで、この竪穴住居を利用してワークショップを開催し、弥生時代の衣・食・住に関する体験学習を行う。実際に弥生遺跡の現地で行うことで、子どもが弥生時代の生活を身近に感じ、理解し易いのではないかと考えた。本企画の目的は、五感を使ったワークショップを屋外の遺跡で行うことによって、子どもに館内では味わえないリアリティーのある弥生生活を、楽しく学んでもらうことにある。また豊橋市にとって、史跡活用の実験例としても位置づけられよう。

日　程

9:20　現地集合（瓜郷遺跡公園）
9:30　受付開始
10:00　主催者挨拶･スタッフ紹介･連絡事項
10:10　ワークショップ開始（～12:00）
（1）瓜郷遺跡を学ぼう
（2）弥生食を食べよう
（3）火を起こそう（3班に分かれて実施、各35分）
12:00～13:00　昼食
13:00　ワークショップ再会（～16:00）
（4）石器を使おう
（5）勾玉をつくろう
（6）弥生布を織ろう（3班に分かれて実施、各60分）
16:00　解散

内　容

講座は、竪穴住居及び公園内に設置したテント2張の計3会場（住居会場、テント1会場、テント2会場）で実施する。参加者（定員60人）を事前に3班に分け、1班を20人として3種の講座をローテーションして行う。参加者には班ごとに色分けした名札を着用させ、一目で班が分かるように配慮した。実施した各講座の内容は以下の通り。

（1）瓜郷遺跡を学ぼう（写真1）
・実施方法／瓜郷遺跡の概要を説明。その後、瓜郷遺跡から出土した遺物を説明する。遺物は土器･石器･骨角器の各種を用意し、実際に子どもに触ってもらい質感を覚えてもらう。（講師／小林）
・準備／遺跡を解説用のレジュメを作成。出土遺物は、弥生土器（壺・甕・高坏）、石器（石斧・石鏃）、骨角器（モリ・ヤス・鹿角）などを用意。

（2）弥生食を食べよう（写真2）
・実施方法／瓜郷遺跡で出土している米やハマグリ、ヤマトシジミを扱う。これを弥生時代の食物例として学芸員の説明を聞きながら甕で煮炊きする。できあがったご飯や貝は、その場で試食する。（講師／岡安・水野知）
・準備／煮炊きにつかう弥生土器（複製）は講師が用意。食品を扱うため保健所に届出をし、代表者が保菌有無の検査を受ける。煮炊きに際しては、保健所の指導に基づき、蓋付容器に食材を入れ、水、石鹸、消毒液を完備。食材は極力触らないようにし、箸や皿も使い捨てとし、食中毒を起こさないように細心の注意を払う。

（3）火を起こそう（写真3）
・実施方法／人間と火の関係について簡単に説明。その後、火起こし器を使って木をこすり、実際に火起こしを体験する。（講師／野口）
・準備／火起こし器は教材用に販売しているマイキリ方式のものを購入。火切り臼等は事前に加工。

（4）石器を使おう（写真4）
・実施方法／石器の作り方を説明し、製作を実演する。その後、子どもに製作体験させる。石器製作後は、各々つくった石器を使用し、学芸員指導のもとモノ（キュウリ）を切り、切れ味を味わう。（講師／水野裕）
・準備／石材には、以前に豊橋の講座で使用した湯ヶ峰産の下呂石を使用。加工用の鹿角、鹿皮等は新たに購入。切るモノには、過去実施の講座でキュウリが好評であったため、今回もキュウリにする。

（5）勾玉をつくろう（写真5）
・実施方法／用意した石を砥石で磨き、勾玉を製作する。つくった勾玉は、紐を通してネックレスとする。浜松市博物館で行っている講座を、そのまま実施していただいた。（外部講師／太田）
・準備／本来は石材に翡翠や瑪瑙が用いられるが、時間的制約等で、篆刻に用いる寿山石を使う。穴あけは、火起こし器の先端にドリルを付け、それを回転させて行う。整形用の砥石は新たに購入。

（6）弥生布を織ろう（写真6）
・実施方法／布について学習し、弥生機を用いて子どもに布を交代で織らせる。また、アンギン編台も設置し、弥生布と縄文布の違いを説明する。（講師／小林、天野：当初は一宮市博物館久保が担当予定であったが、都合により急きょ講師を変更している。）
・準備／弥生布の機織り器は一宮市博物館のものを使い、すぐ織れる状態まで準備。

募集方法

募集方法は、広報とよはし3/1号及びチラシ、新聞にて告知し、往復葉書による事前受付とする。小学校4年生～中学校3年生までの定員60人を募集。（応募約100人、当選60人、当日参加者59人、1人欠席）

感想

- ハマグリが一番おいしかった。（中3男子）
- 弥生食がおいしかったし、作った石器も良く切れた。弥生時代のことが学べてよかった。（小5男子）
- 火起こしは煙だけしか出ず、手が疲れた。（小6女子）
- すごく楽しかった。火も簡単に起こせた。何だか生きていく自信がついた。（小5女子）
- 一番心に残っているのは勾玉作り。丸みを作るのが難しかったけどがんばった。（小5女子）
- 昔の人は大変だったなあと思った。（小4男子）
- 瓜郷遺跡について、地元に住んでいてあまり知らなかったが、色々と体験してみて大昔の人の生活や苦労がわかり、瓜郷遺跡が身近なものに感じられるようになった。（小5女子）
- 勉強になった。勾玉を作ったのが楽しい。（小5男子）
- 石器や土器を触ったとき、「2000年前の人と握手してるんだよ」と聞いて感動した。（小4女子）
- 楽しかったし、友達ができてうれしい。（小6女子）

今後の課題

今回は、国史跡の瓜郷遺跡を利用して初めて行うワークショップであり、弥生生活を理解し易い環境である反面、会場自体の問題点も多く感じた。まず、交通の問題である。バス等の公共交通機関が近くに無く、参加者の大半は車による送迎にならざるをえない。だが、現地の遺跡公園には駐車場が全く無い。学校の先生から駐車場がないなら子どもには勧められないというクレームの電話もあり、急きょ民間の駐車場を確保することとなった。交通が不便な場所で実施するワークショップのあり方も考えさせられた。次に、遺跡公園が住宅街の真ん中に位置している点である。これについては、事前に周辺住民に周知し、総代会を通じて町内に回覧して理解を求めたためトラブルは生じなかった。更に、公園自体が狭く竪穴住居があるのみで、諸施設が完備していない。このため使い勝手の悪さを感じざるをえなかった。

講座についてであるが、常に3種の講座を同時に実施、終了させなければならなく、時間との戦いになってしまった。特に、竪穴住居内での米や貝の煮炊きに時間がかかり、他の講座が終わった子どもが待機する場面が恒常的になり、スムーズに事が運ばなかった。弥生食を食べようは、住居内での実施のため、弥生生活の体験には一番適していたが、講師は火の管理（過去に不審火で住居が焼失）に追われて充分な講義ができなかった。この点は企画者の時間配分ミスであり反省する。

瓜郷遺跡を学ぼうは、本物の遺物を触ってもらったが、遺物が出土した現地で触れるということは、博物館で遺物を触るより印象が残るものと思えた。また、講師等の言葉（2000年前の人と握手してるんだよ）に感動したと感想にあるように、ただ物の質感を覚えさせるのではなく、それらの道具を使用していた弥生人にまでイメージを膨らませるように働きかける努力の必要性を感じた。

火を起こそうは、火種が出来ない子も多々みられ、火を点けることの難しさを学んだという感想が多かった。ただ、夢中になりすぎて火起こし器の回転している重りで軽い傷を負う子どもが若干みられ、実施には細心の注意を払わなければならないと感じた。

石器をつくろうは、粗割をした剥片に刃をつける体験であるが、石でモノが切れることに子どもは驚いていた。当初は、切削体験の他に弓矢を射る体験も考えたが、準備不足で実施できなかった。この点は複製した石鏃を準備していただいた講師に申し訳なく思っている。

勾玉をつくろうは最も人気があり、女子の参加が多かった背景には、この講座の存在がある。時間が少なかった

写真1　瓜郷遺跡を学ぼう（写真1）

写真2　弥生食を食べよう（写真2）

写真3　火を起こそう

ため、未完成の子どもが多かったのは残念であるが、子どもには好評の企画であった。今後は、当時の孔あけを再現するなど、より本物志向のスタイルで実施できないか検討したい。

弥生布を織ろうは、住居内で実施したため弥生機が４台と少なかった。このため、１人５分程と体験時間が短くなってしまった。それに対して講師１人で２台しか面倒がみられないため、講師にとっては自転車操業の慌ただしさとなってしまった。この点は反省材料である。

今後の課題として、どの講座もそうであるが、例えば何気なく割っている下呂石等の材料が、弥生人にとってどれだけ貴重で、かつ、手に入れるのに苦労したかを伝える必要性を感じた。時間が無いといえば言訳になるが、岐阜県下呂町の湯ヶ峰まで下呂石を採取に行かせるところからスタートするような、労力の必要な講座も行わないと楽しいという感想のみで終わってしまうような気がした。今後、子どもに苦労をどのような手段で、嫌がらせずに伝えるかを研究する必要性を痛感した。

企画してみて

企画者として、このワークショップを通じて感じたことを述べたい。まず自分自身の立場であるが、今回は運営に徹し、講座には係わらなかった。自分も学芸員として何かを受け持ちたいという気持ちもあったが、いざ始まると段取り、マスコミ対応、記録、雑用等に追われ、とても行っている余裕などはなかった。運営に徹するという判断は正しかった訳である。ただ、講座を行わなかったため、参加者と余り触れあえなかったのが残念である。

講師の面々は、それぞれ各館で講座を開催している学芸員であり、得意な分野を行っていることもあり、与えた内容について全て任せることができたため、運営は楽であった。それと同時に話の運び方など参考になる点が多数あり、様々な刺激を受けた。この点がワークショップ共同開催の良い点であると再認識した。今回は考古のワークショップということから、考古の学芸員ばかりが集まった。だが、他分野の学芸員にも企画に参加してもらい、考古の学芸員では気がつかない、違った視点からの切り口でワークショップを考える必要性もあったのではないかと感じた次第である。

今回限りの初の試みとして、抽選にもれた約40人を対象に、豊橋市美術博物館主催で同様な内容のワークショップ「続・体験！弥生生活」を春休みの３月25日に行った。当日は雨が残ったにもかかわらず、半分の20人が参加した。竪穴住居内でのんびりと弥生食以外の講座を実施したが、子どもたちは熱心に参加しており、この時、ワークショップの原点がみえた気がした。やはり、自分がワークショップに参加しないと子どもとの意志疎通は難しいし、じっくりと基礎から教えないと子どもの記憶に残らないのではないのだろうか。大規模に行うワークショップも当然意義があるし、大きな成果をもたらすであろう。しかし、そのようなワークショップを続けると息が続かない。少人数のワークショップの大切さを再認識し、それらを継続して開催することは大きな力にもなると思う。

最後に、12月末に急きょ企画したとしては、よくやれたものだと我ながら感心した。トラブルを防止するために雇ったガードマンが朝一番でトラブルを起こすとか、補助金の採択の可否がギリギリまで分からないなど、色々なことがあったがそれも過ぎた想い出である。今回の「体験！弥生生活」が愛知県博物館協会子どもと博物館研究会の最後のワークショップとなった。研究会を通じて他分野の学芸員と知り合うことができ、また様々なワークショップの手伝いにより刺激を受けたし、勉強にもなった。今後、子博研での経験を生かして、更なる発展ができるよう努力を続けていきたい。

（写真４）　石器を使おう

（写真５）　勾玉をつくろう

（写真６）　弥生布を織ろう

はこ（上・ふた）
かるた
一宮市博物館

はこ（下）
伝えるということは？
一宮市博物館

い
ろ
は
に
ほ
へ
と
ち
り
ぬ
る
を
わ
か
よ
た

い
イノシシの毛皮は猟師のおざぶとん
ろ
ロウ石は昔の子どものシャープペン
は
墨に供えたあかい土器
に
人間の体の中のある部分
ほ
ホドの火にかじ屋の汗が光ります
へ
ベーゴマをえいっと投げてくるくるまわす
と
とどけてね飛騨のおじさん遠くまで
ち
調査して明日のために役立てる
り
リスの毛も名画を描く筆になる
ぬ
布をしく弥生時代の貴ゴくり
る
瑠璃にもまさる土器の子
を
おくのおくじっと何かがひそんでる
わ
「わどはゴッホになる！」と横方さん
か
貝塚は歴史をひもとくたまてばこ
よ
横折りの手紙はすこしていねいに
た
台付鉢煮炊きに使ったすぐれもの

子ども向け解説書「かるた」

れ 歴史ある
和紙は木の皮
はいですく

そ 空青く
プーンとうなる
あぶたこあげて

つ 春の中
実りの秋を
たくわえる

ね ねんどなら
どんな形も
自由自在

な なつかしい
ふるさとはここ
佐分さん

ら 楽ではない
縄文人の
狩りの技術

む むずかしい
手紙のきまりに
この手本

う 受け継いだ
過去の遺産を
伝えゆく

ぬ 石を割り
道具にかえる
いにしえの人

の 野っぱらで
やきもの焼く穴は
いせいよく

お 男の子よそだて
加藤 清正

く くずれるか？
いやくずれない
やきものは

や ヤナギから
できた木炭
デッサン用

ま 墨絵石井は
みがいて作る

け 消し炭を
大事にしまって
また使う

ふ 文楽の
木偶の動きに
心うたれ

こ 鉱石を
くだいてつぶして
顔料に

え エンガワで
おにいさんと
ころころをする

て 手紙かに
ちょっと一言
絵葉はがき

あ 明日をあびた
鎧台さん

さ 佐分さん
パリでもおとなり
荻須さん

き 木の生きた
時代をさぐる
年輪から

ゆ 湯をわかす
水をくんだよ
お手伝い

め めざせ！
未来の学芸員

み ミズナラや
キリは
高級家具になる

し 光をむかえ
祈りをこめて
土にほうむる

糸 絵を描く
ほうきのような
筆もある

ひ ひみつだよ
手紙に封して
送ります

も 文字よりも
祈りを描く
絵一枚

せ 石鏃を
矢の先につけ
イノシシ狩り

す すみつけて
まずはじめに
ごあいさつ

京 今日からは
あなたも館の
リピーター

おわりに

愛知県博物館協会子どもと博物館研究会は、平成10年度に構想を立ち上げ、平成11年度に発足してから4年が経過した。研究会の開催、注目されいてるワークショップ・展覧会の見学、ニュースレターの発行、ホームページの作成などのさまざまな活動をしてきた。また、各館園の教育普及活動の実施報告をはじめ、情報交換も行った。愛知県博物館協会内の研究会とはいえ、組織の末端とも言える学芸員にまで研究会の活動情報が行き渡ったかは定かではない。さらに、研究会の参加が出張扱いになることなく、休暇を取っての参加を余儀なくされた学芸員が少なくなかったのも現状であった。その現状の中で、少しでも各館園の普及活動の拡充を計るべく、自費で研究会に参加していた学芸員も多い。

この間、文部省の委嘱事業、今回の文化庁委嘱事業の2つの大きな事業を実施し、その都度報告書を発刊、失敗も含めてその内容を明らかにしてきた。2つの大きな事業をする中で、各館園の運営、実状など、多くを学んだと言える。

そして、専門分野の異なる館園の学芸員が集まることで、展示方法、考え方の違いを実感した。特に、分野によるワークショップの方法や考え方の違いを知ることができた。一方、自館における研究だけではなく、自然と歴史、美術、科学など、各分野の共有の理解が不可欠で、グローバルな視点の必要性を感じたことも確かである。事業を通じて得た、さまざまな館園の学芸員や職員の交流は、とても有意義なものであった。

夜、自らの館が閉館してから駆け付ける皆に感謝しつつも、「まだかな～。」と焦りながら待つ事務局の苦しさも、今となっては良い思い出である。

◇◆◇

研究会として、まだまだやり残したことがあることは確かである。しかし、今回、失敗を含めた今までの成果を身に付け、今一度会員が自らの館へ立ち戻り、新たなる活動をしていく区切りができたのではないかと考えている。そして、この事業を最後に、愛知県博物館協会子どもと博物館研究会は解散することとなった。

これまで研究会を支えていただいた愛知県博物館協会加盟館園をはじめ、その職員のみなさま、ご指導・ご協力を賜ったみなさまに、この場を借りて深謝の意を表したい。

◇◆◇

ここ数年で、教育普及活動の意義、必要性、在り方が目まぐるしく変わった。さらに変化を続ける教育普及活動に対し、リーダーシップをとることができる「愛知の博物館」であるために、屋台骨を支えているそれぞれが頑張っていかなければと思うのである。どこかで、子どもと博物館研究会の活動が活きていることを願いながら。

2003.3.31　愛知県博物館協会子どもと博物館研究会

（文責　事務局）

謝　辞

今回の事業を実施するに際しては、平成14年度の愛知県博物館協会 長谷川三郎会長（前愛知県美術館館長）をはじめ、事務局のみなさま、加盟館園のみなさまには多大なるご指導、ご協力を賜りました。さらに、ご協力を賜りました皆様のお名前を以下に記し、深くお礼を申し上げます。

◇◆◇

愛知県陶磁資料館　愛知子どもの国　荒木集成館　安城市歴史博物館　一宮市博物館　稲沢市荻須記念美術館　小原村和紙展示館　蒲郡市博物館　刈谷市美術館　名古屋市博物館　名古屋市見晴台考古資料館　高浜市やきものの里かわら美術館　十日町市博物館　徳川美術館　豊田市郷土資料館　トヨタ博物館　豊橋市自然史博物館　豊橋市美術博物館　浜松市博物館　はるひ美術館　鳳来寺山自然科学博物館

◇◆◇

浅田員由　足立理恵　阿野文香　天野幸枝　息野美世子　伊藤智子　伊藤路子　伊藤　孚　李　浩季　今堀里佳　太田好治　岡安雅彦　奥村　正　小椋克好　小田美紀　加藤和敏　加藤た美子　鬼頭夏子　小池富雄　纐纈　茂　小林久彦　小林弘昌　近藤直樹　佐伯裕子　清尾有希　高橋真理　竹内利明　鶴見和子　冨樫　朗　富田沙織　脇田節子　西村陽平　原田　幹　平岩里張　伏原昭子　本間久子　宗沢清美　松本育子　水野裕之　森下雅代　山崎　健

平成14年度 文化庁芸術拠点形成事業報告書
「伝えるということは？～学芸員が贈る子どもたちへのメッセージ～」

編集●愛知県博物館協会子どもと博物館研究会
発行●愛知県博物館協会
〒461-8525　名古屋市東区東桜1-13-2 愛知県美術館内
TEL052-971-5511 FAX052-971-5604
印刷●ヨツハシ株式会社
〒501-1136　岐阜市黒野南1丁目90　TEL058-293-1010